

にする。更に小屋に一寸休んで、下山の途につく。上り途は約三時間半か四時間間で充分で、下り路は二時間で澤山だから、晝過ぎ早く中房に歸着して、温泉にゆつくり足を延ばすことが出来る。

登山の詳細は別章生徒の日記と、附録「中房を中心とした日本アルプス」の條に譲つて、今登山が生徒に及ぼす影響を考へて見ると、兎に角アルプス連峯を初めて見た時の壯美の感は、到底言語に述べ難い深い強い精神的感化を與へるもので、東京の生活にも永く無限の影響を與へるのである。此の後學生が夏休みの思出を談る時には、必ず話が此所へ来る。一日の登山の中に絶好の剛健忍耐の経験を與へる。壯美の感痛快の感は眞純な少年の精神を飽迄も變化にさせねば置かねものだから、何と言つても他所に得られぬ精神的効果を植付けるのである。一度登山がすんで二三日たつと、また登山をせがみ出す。もし初めの登山の

日が霧と雨でも有れば、尙更第二回の試みをしたがる。第二回目には最初の経験の結果、頗る巧みな登山が出来る。高山は幾度登つても、天候の工合は其都度異なるから幾度でも違つた経験と修養が得られる。そして精神的の影響は益々大になる。

上級生の有志は二回目の登山の時に、槍ヶ岳へ向ふ。之れには更に充分の登山準備が必要である。先づ雨具の完全なものと、防寒具の用意、たとへば毛布、冬シャツの如きが必要で、ルックサックも欠く事が出来ぬ。だから槍登山を欲するものは東京を出發の時から其の用意で來ねばならぬ。

必ずしも槍ヶ岳ばかりで無くともよい。常念の小屋に一泊して、常念の峯も極めて翌日歸るなども適當な旅程であるが、兎に角槍ヶ岳は北アルプス第一の高峯だといふ事と喜作新道が中房に縁故のある路で、興味が有るとの理由で、

多くは槍を望むのである。もし風雨が暴れたら二俣の小屋から、中山峠をへて槍澤から上つてもよい。そして喜作新道に馬の背越の痛快を叫び、喜作の小屋に寒い一夜を毛布に包まれて焚火の傍にあかして、翌朝槍の絶嶺で御來光を拜して、四方の展望を肆にし、痛快壯絶の氣に打たれて中房に歸着することは、忘れ難い尊い經驗である。書き來れば登山の光景と、其の影響とは書くべき事が限り無いが、之れは例の別章に譲ることにしやう。

林間學校で槍迄の登山が出来るのだから、成城中學校の山岳隊は在來の如く、別に白馬や常念の登攀を計畫する必要は無くなる。林間學校に参加して、暫く山に馴れ、身體の準備も整つてから、如上の登攀を試みる事が、登山の方法としても最も賢い方法で、限りある費用と、限りある日數の豫定で成功する所以である。

第十四節 歸途見學旅行

愈々明日は下山するといふので、昨日から荷物の整理に急しい。昨日荷物の一部を既に有明に送つたが、今日も亦馬が三頭ばかり来て、残りを皆運んで行く。二週間の山中生活で、都の空が戀しくなつて来て、歸心矢の如きものは有りながら、愈歸るとなれば、さすがにまだ止つて居たい氣持もする。來年あたりは、希望者は更に止めて置いて、尙ほ一二週間の靜かな生活をさせて見るに面白い。下山に當つて多少の病人でも有つたなら、其れは前日に誰か教師と共に有明迄ゆつくり下つて待つて居るがよい。

朝七時愈々下山の途につく。峠路で辯當をすます者もある。例の有明神社で休憩するから、其所で晝食する者も有る。有明神社の下の高原の道傍の柵林に

柞蠶天蠶を放ち飼ひにして見る所が見える。立寄つて見學する價値が有る。下の宮城あたりの村家で、その繭を手取りで糸にして居る所をよく見ることも出来る。有明驛前の中房支店で暫く休む。始め下山に當つて、一般に注意が下された。曰く「下界に下れば俄に熱いから、むやみに氷水やサイダーを飲んで腹を毀ぶ事が多い。氷を護むが第一の用意」と。そして實際一日の長途を炎天下に來たのだから、たまくなつて先生が先づ禁制を犯したのは大笑ひで有つた。

午後一時信濃鐵道に乗る。松本で下りて、二時間ばかり休憩する。あひにく今日は下界でも稀れな熱さなので、疲れた者は休息を旨とし、元氣な者は見學に出かける。松本の古城は深志城といつて、今尙其の天主閣を残して居る。それから郊外強清水ゴハシジツに片倉製糸工場を訪うて見學する。今迄暫く山中の自然にばかり親んで來た目には、人工の細微な絹糸や、精緻なる機械に働く勞働の人

間を見るのも對稱が面白い。

松本から篠井線の列車に乗込むと、犀川の畔を通つて北へ北へと進む。犀川の上流は梓川といふ、あの上高地の附近から來るもので、更に其の上流は槍澤川で、吾人の踏破したあの槍ヶ岳の大雪溪に發することを思出す。

麻生オミといふ停車場を通過する。此邊は地盤が堅牢でない所で、雨期に當つて幾度か地滑りをして、汽車を不通ならしめる有名な地點である。此の邊から東の方を見ると、牛伏寺ゴフツツ峠の連山が、遠く南の方諏訪境の和田峠から延びて來て、冠木山につながつて居る。そして犀川を隔て、日本アルプスの脈と平行して居るわけである。犀川の谷や、牛伏寺の山脈の成生變化の研究は、地質學上の好題目となつて居る。冠木トンネルは、附近中央線では可なり長いものである。此れをくぐつて北に出れば、姥捨の高原で、目の下に善光寺平の平原が夕靄の

中に展開する。

姥捨山は有名な傳説の地であるが、汽車は山の中腹を通つて、古跡の岩が眼下に見える。月の出るといふ鏡臺山が遠く東の方に見える。目を放つて遠望すれば、前面に善光寺平を貫く犀川が、此方から北走して行つて、東から来る千曲川と合する邊りが例の川中島であらう。此の姥捨の停車場から見ると、東西北に渡つて、信越線及篠井線の停車場が一望幾つか、皆手に取るやうに見える、停車場の中で斯く迄展望のきく所は他所に少い。

やがて汽車は川中島を過ぎる。時間が有れば、立寄つて、古戦場の跡々を訪ねるのだが、今は只夕闇に通り過ぎてしまふ。暗くなつてから、電燈に榮ゆる佛都の空を見上げながら、長野驛に下車して、直路善光寺近くの扇屋五明館に投宿する。

今迄暫く山間の物資不足の所に暮して居たのだから、宏大な設備完全な旅館で、幾十疊敷の大廣間に足を延ばして、豊富なご馳走の食膳にありつく事は限らない愉快で有る。浴室も設備が善い。三階の欄干に倚つて薄月夜の市街を見下す浴後の氣持ちよさ。總べて長野の旅館は善光寺詣の團體を取扱ふことに馴れて居るから、待遇が贅澤では無いが氣持がよい。善光寺大門の附近の名高い蕎麥屋でも音づれて本場の更科蕎麥に舌鼓を打つて來るも一興であらう。

夕食後に生徒の體重を計る。山間二週間の生活で、ことに下山の一日が炎天で、汗を絞り出したので、一般に體重が減つて居る。(體育に及ぼす影響の條参照)。

翌日はゆつくり起きて、善光寺に詣でる。「お誠壇」の暗闇にはいつて信仰の念を試めされる。善光寺は信仰の道場であるが、更に吾人に尊く思はれるのは

此の寺の建築で、恰好よい壯重の古い建築が我國の美術史上得がたき國寶であると思ふ。淺草の觀音あたりで喜隨の涙を流して居る輩は、須らく此の高壯雄麗な美術に來て三嘆するがよい。傳説に傳へられた悲しい石童丸の墓が市内にあつて、刈萱堂といふのが市の後方の丘に有るが、一々訪ふ暇が無いので、此の善光寺の本堂にぬかづいて、「石童丸の和讃」を読んで貰ふと面白い。よく専門家の歌ひ手が居て、美しい悲しい聲で、可憐な童を吊ふにふさはしいメロディを聞かせて呉れるから、靜かに其の哀調に耳を傾ければ、山から來たばかりの眞純な氣持の吾人には、深甚の印象を残すのである。

直ぐ此所から丘つゞきの城山に上つて、城山館の一角から、川中島を瞰下して、古戰場と古英雄のあとを偲ぶ。更に向ひの遠い山脈の一部に、松城の象山といふが見えるから、信州の英傑佐久間象山を懷ふ氣持が一ぱいになる。

城山のつゞきの裏山へ上つて、名物の林檎島を訪ひ、枝からちぎつて來た水の滴る果實に舌を打つて東京への土産を調へる。

正午頃信越線の汽車に乗つて、始めて都につながつたやうな氣持になる。汽車は上田の城跡を左に見て、佐久の平に入る。南の方八ヶ岳のつゞきの山々が見えて、まだ山國の情調が盡きない。そして北の方に淺間山が近づく頃に、小諸といふ一小驛に着く。千曲川の流れに程近い所に、あの詩人島崎藤村が暫く住んで居たといふので、文藝に志す者が去りがてに偲ぶ場所である。下車するには時間が無いから、一寸プラットホームに出て見ると、午後の靜かな空に高原のけはひがして、あの詩人が天才を抱いて旅情に悲んだ情調が懐しくてならぬ。そして彼れの絶唱「千曲川古城のほとり」が口に浮ぶ。或る人が嘗て白馬岳に攀ぢて、山岳の靈感に始めて打たれての歸路、この小諸を過ぎて、彼の詩人

を慕ひながら、「山岳にも増して此の邊りの信州が懐しい」と言つた言葉が、今思出されるのである。

四邊が冷氣を送つて來て、高原に入ると思ふ所は、輕井澤で淺間の煙が靜かに天に上つて居る。あの隠かな姿の山が、時折人の忘れた頃に爆發しては、世間を驚かせ、信州の名を世人に忘れしめぬ役を務めて居る可愛い山である。急ぐ旅でなければ、此所に下車して、裾野の客舎に一泊し西洋人の運動場でも見學することも興味があらう。そして夜行の汽車で翌朝早く上野に歸るのも一法であらう。

淺間の裾野が盡くる頃は、碓氷のトンネルに入る。長くも無いが暗に入つて出る事二十六回、アプト式電氣機關車なども見學の好資料で、關東の平野に面しては、古への日本武尊の悲しい尊い追憶が胸にせまる。

安中、高崎などを過ぎれば、もう都に近いわけ、汽車は薄明から夜陰に入つて、八時頃上野に着くのである。

歸途の見學は目先が變つて有益では有るが、然し纏へつて考へて見ると、二週間思切つて山の自然に没頭して、大自然の感化に徹底したものが、なまじ歸途に人工の世界に歸つて、雑沓の神社佛閣などにうろつくのは、實はあまゝ愉快でも無い。或は歸途の見學旅行は無くもがなで有るかも知れぬ。泥んや今迄六十度の清涼の朝夕に馴れて居た者が、下界九十餘度の炎天下をさまよふ如きは、害有つて益無い事かも知れぬ。下山の時から特に暑熱の日がつゞくやうならば、急行一直線に歸京してしまふも一法かも知れぬ。

最後に歸途見學の主要なる條項を列記すれば、

一、松本市——舊城天主閣——高等學校——片倉製糖工場——淺間温泉場。

- 一、犀川——梓川。
- 一、牛伏守山脈——犀川の谷の成生。
- 一、篠井線——麻生附近——冠木トンネル。
- 一、姥捨山。
- 一、川中島——松代——佐久間象山。
- 一、長野市——善光寺——石童丸の傳説——城山館——林檎島——長野地方の産物。
- 一、信越線——田——小諸——詩人藤村。
- 一、輕井澤——淺間山——千曲川。
- 一、碓氷峠——日本武尊——電氣機關車。
- 一、群馬縣——安中——高崎。
- 一、埼玉縣——大宮——熊谷——上野。

第七章 生徒の日記

五年生 青山 達三
 三年生 渡部 清

七月廿二日 晴 授業休み、

「ガラ／＼雨戸を繰る音に漸く目が覺めぬ。まばゆい太陽の光りが目を射る。枕元の腕時計は七時だ。

おや雨かしらと聞耳を立てると、いかにも雨の音の様だが、それは川の流れる音だ。土手の下の方から聞えて来る水の響はほんとうに心よい音楽的なリズムで續いて行く。

いつもの朝とまるで容子が違つたので少からず面くらつた。段々自分は中房

に來てるのだと云ふ意識がはつきりして來ると、やつと安心が出來て、もう一
寝入りと云ふ様な氣分になる。

兩隣りのSもMも、目を覺ましてゐた。

「起きよう。」「うん起き様」「寒いネ」「あ随分寒いネ」そう云ひ乍ちかい巻の襟を合はせる。秋十月から十一月頃のやうに肌寒い。山氣ヒシ／＼と身に迫ると云ふ調子。幸ひ昨夜遅くバスケット丈は、着いて居たので、揚子とタオルを持つて浴室の方へ行く。

椽に立つて、麓の方を見ると、朝霧が谷間を罩めて、神々しく、一種云ふべからざる威嚴に打たれる。高く聳えた山々の姿、黒い林の様子等は、云ふに云はれぬ自然の神秘、清淨な天地の景色である。聞き慣れぬ山の鳥の囀りが聞こえて來る。

谷の底からムク／＼湧き出す様に白い煙り―雲が高く空に昇つて行く。いつまで見て居ても、後から／＼盡き相にない。

清々しい仙人の様な眞純な氣持で、冷たい朝の空氣を吸つてそれ等の景色を見つめて立つた時、ほんとうに山の有難さを感じた。其處には何等の汚れもない。全く山の偉大さに魅了されて仕舞ふのだ。

獨り山に登る者のみに與へられた此の自然の恵み。さながら神そのものゝ如き姿は倒底如何なる藝術家と雖も、あのまゝの姿を描出することは、一寸困難であらう。僞らぬ眞實さがある。眞に人に迫る何者かを持つて居る。

僕は暫らく恍惚として立つた。

氣がつくとすぐ下を二人、三人、或ひは數人、元氣に満ち、希望に溢ふれて、カメラや水筒を肩に、重いルックサックを負うて、新らしい革鞋を一足腰にぶ

ら下げ、手拔を首に、幾度かの登山の誇りを物語る金剛杖を強く握りしめ、目指すは槍か、穂高か、勇ましく燕岳に登つて行く。

「あの多くの登山者の總べてに幸あれ！」心の中にこう云つて祈つた。

それにしても僕達の登山は、何時行はれるのか。まだ登山——中房迄でも登山の一ッだらうが——の一度の経験も持たない自分はひたすらそれが待たれるのだつた。

一度は必ず数日中に來る筈の其の日を考へ乍ら、風呂場へ行く。濛々と白く、一杯になつた湯氣の中にT、E、などの先生方の顔が見える。如何にも屈托なさ相に、満足氣な様子だ。やがて、各室から賑やかな笑聲が聞こえて來た。

これからほんとうに中房の生活が初まらうとして居るのだ。

食堂から出て、部屋から下を見ると、川原で女生徒が髪を結つてる。其の向

ふには三四人が、しきりに洗濯をして居る。非常に懐かしい感じがした。多分昨日僕達と一緒に登つた高崎の女學生だつたらうと思ふ。

午後一時頃僕等のトランクやバスケット等を澤山つけた駄馬が登つて來た。

二年生は殊に大騒ぎだつた。

自分の荷物が後に残されたのを大いに不平がるもの、早速中を開いて珍味を分配するもの。お蔭で僕等も大分恩澤に浴した。

一シキリ其のざわめきが鎮まると、校舎の中はシンと静まり返へつて、物音もない。

今日は慰勞日だから、一日遊ぶ。

着物が來たので洋服を着代へて、游泳場へ行く。

泳ぐこと二回。泳場はかなり廣く、泳いだ後でメキシコの海水浴ぢやないが、

涼みに出る。明日からは、起床と食時に柏子木を打つて、毎日常番をきめることになった。寝ながらあたりの山々を眺めてゐると、俳句でも作りたくなつて来た。

山を見て寝てゐりや値五萬圓。

ベケ有ります。

夕方四五人連れてそこいらを散歩して歸へると、今晚浪花節があると掲示があつたので、食堂、いや臨時の寄席へ行く。

待つこと暫し。更に初まる模様もなく、當の本人の姿も見えず。とうとう先生が演壇に登られ、藤村の詩の一節を暗誦して降壇された。

それから二三人色々隠藝をやつて、最後に今一高に在學する先輩保岡氏の痛快な、應援歌の獨唱が終はつた時、八時半頃、日本何んとか云ふ偉らい名の雲

衛門が来たが、まづかつた。雨がひどく降り出した。

途中で失敬したので其後は良く知らない。

七月廿三日、快晴

昨日と同じ様に、眼が覺めると、雨かしらと、又考へさせられた。

雨戸はトウに開いて居つた。他の室は皆どれも四人以上だが、僕等丈は三人切だ。それが揃つて寢坊なので仲々起きない。先生がワザ／＼起しに来て下さつた。

朝飯前に數學をやる事になつた。

グラフの講義。食堂は兼講堂であり、且つ集會所であるのだ。

室に歸へつて、宿題の計算をやる。

やがて一時間程して、朝飯になる。

今度は英語だが、あまり調べてないので少し心配だった。見晴しのいい五年級の室で三年生七人、教室の様に、堅苦しい姿勢をとる必要もなく、自由に各所に陣取つて代る／＼譯して行く。

本は、The English Student's Holiday Companion. の第三巻だアラビアンナイト物語の中の一編である。

英語が終はると、直ぐ先生も一緒にプールへ走つた。

猿股一ツで馳け出して行つて、ザンブと飛び込む。

後で考へると、あの游泳池のお蔭でどんなに、僕達の無聊が慰められた事かと思ふ。

昨日の夕方、同じ東京から第三高女の猛者達が登つて來た。

午後四時からその先生方と同行の一中の生徒二人、及び湯泉場主百瀬氏等を

招待して、小さなティーパーティーを催した。

只一杯の紅茶ではあつたけれども、ほんとうに愉快な時を過ごすことが出来て、嬉しかつた。

夜電燈の暗いのに、少し閉口し乍ら代數と英語を豫習して、寢に就く。

今日から圖書掛りを命ぜられて、僕等の室はライブラリーになつた。そして、終日讀者が絶えなかつた。

七月廿四日、晴

今朝の英語授業は、戶外でやる。氣持よいこと限りなし。

午前中プールに於ける競泳に於てT先生は、額及び鼻の頭に微傷を負ひ、大いに顔面の美を損ず。轉た同情の念を禁ずる能はず。

試みに崖を下りて、中房川の水に浸つて見ると、冷き事氷の如し。到底數分間

入るに耐へず、勿々歸舍した。

歸へれば即ちライスカリーの珍味あり。蓋し近來の福音と云へる。又明日もとひそかに心に祈りつゝ、食堂を去る。

夕飯を終はつて戶外に出れば、戦雲地を掩ひ、殺氣天に漲つて居る。

將に林間學校對女學校娘子軍のセンターボール戦が開かれんとはするのである。敵味方はせて無慮十四名。我が二年軍は戦術を覺らず。娘子軍善戦大いに務めたので、我が軍の影暮霧と共に薄く、一敗して兜を脱いだのも隣れであつた。

夜多田先生に音楽をならふ。

夜怪談の催しがあつた。T先生の話し最も凄し。二年生の小膽者 悲鳴を上げて倒るることあり。

「三井君失_レ置_レ棚時計。君大驚而求_レ之不得。君嘆曰之爲_ニ記念_一送我叔母_一者也。一度失_レ之復無_レ歸。嗚呼悲哉。我何面目見_ニ父兄_一。我等大慰_レ之。然時計終不_レ現_ニ其姿_一。我大怪且怒。願告_ニ之先生_一以得_レ之耳。然終無_レ爲_ニ至_一今日不_レ現。」

(東鏡)

七月廿五日、晴一時雨

今日S先生にまつはる情緒纏綿たるローマンズの一ツが、中房の自然境に織りなされたさうだ。口さがない中房童達は、しきりにそれからくへと傳へる。それからあらぬか先生は朝からしきりと、美人の肖像を描いて居られた。

部屋には先生の筆になつた油繪二枚壁間にかかつて、殊に趣を添へる。

突然女學校の一同が明日槍ヶ岳へ向つてしまふといふ事を聞いて、急遽今晚演奏會を開く事に決し、T先生について大いに稽古をする。

性來の蠻聲、先生の努力も空し。然し歌らしきもの二三どうやら出來上る。

午後五年のMさんと蒸し湯に入る。床の下に熱湯が沸き返るので、飽屑と蕘がなければ、ウデ鎗の様になるだらう。

初めの中は非常に息苦しいが、やがて全身より瀧の様に汗が流れ、慣れれば案外氣持のいいものだ。

特に頭の爲には卓効あり等、僕等より先に入つて居つた人の説明だ。

三人位で満員になる。時々小窓を開けて外をのぞくが、其他は眞暗な中に仰臥して休む。三十分位で飛び出した。

「泳ぎ場に苔の生え、こちたくきたなしとて、十あまり五六の人数にて洗はむとて、湯をこよなく捨てたるは、又なくあひなしや。わづかにきたなしとて、

ふた夜三夜とも泳げざらましかば、いかゞせむや。ものわきまへざる人の行ひこそげに／＼なげかはしき極みなれ。ひとり午の刻のころ山路にたづね入ることを侍りしに、遙かなる苔の細道ふみわけて、一の湯のふき出づる所あり。あたりは木々のけじめ見え、こちたくあはれにもあかし。じやがいもを手ぬぐひに入れば、これに入るものから、たちまち甘き芋のうまるゝぞかひある。こよなくうまさきものから、ほうばいにも興へ喜ばせむとて、山をなむかけにかけて下りつる。」(つれづれと)

七時演奏が始まる。

そして皆歡を盡して、九時過に散會した。來賓も多く頗る盛會であつた。高女生等の立派な演奏に比べて、主催者側の、貧弱なる。大いに赤面した。

殊に清水先生のメロデーに至つては、一同只光惚として傾聽した。先生は

麻布女學校の音楽の先生である。女生徒等の間にも感歎のさゝやきが聞こえた。ブラにグラムは長くなるから今畧す。

夜霜田先生の令弟霜史光氏来る。氏は詩人である。一同に紹介された。其の場で、又怪談初まる。

夜は森々として更け行き、谷川の水の音、梢を靡する風の音のみサラ／＼と響いて物凄。車座に坐せる人々の顔には不安の念押え難く、互に目を見合せて一言も無く、幽玄の氣堂に漲る。

突如バサリ、背後に物音あり。膽を冷して振り返れば、天井から莫塵が落ちて來たのだ。隣室にドット笑聲起る。

何人の悪戯か腹立たしく、しきりに天井をにらむ。

二年生の顔は土の如くに青かつた。

話半で我室に返り、數日間の日誌を記して、寢につく。

時々食堂の方から重々しいT先生の話し聲と、二年生の叫ぶ聲等が聞えて來る。此の日からT先生に「お怪け」の尊稱を奉る。

七月廿六日 雨

朝寢坊して居ると、先生が入つて來て、僕の蒲團をめくつたので、驚いて起きてしまつた。そこで一句つくる。「中房でやりきれないのは朝のねむさ。憎いことには先生が、又もはがしにやつてくる。」

霧深く山頂を掩つて、時々驟雨が來る。登山の人々は随分困難するだらう。殊に女學校の一行は無事か、或るひは隠家でもさがして居るか。彼等の身の上が案ぜられる。

蓋し人間の至情の然らしめるものだらう。

夜鶴飼先生の中房に關する講話があつた。

七月廿七日、快晴

東京を出發して早や丁度一週間は過ぎた。

午前中、學課が濟んでから、弟や郷里の友人やに通信を書く。其他暑中見舞等中房の繪ハガキを買つて書いた。

大いに山の神祕を説き、自然の崇高を宣傳する。

天氣がよければ、一日に一度必ず登つて來る郵便屋のおぢさんは、僕等の大好きな人になつた。

誰も彼も、自分の所に便りの來るのを待ち、來れば雀躍して喜ぶ。暫らく東京の便りにも接しなかつたが、偶々Sに來た紙によつて聞けば、九十何度の灼熱だと云ふ、實に中房はそれに比べては極樂である。

それにつけてもいつまでも此處に留まり度いと思ひ、又何んとなく我家が戀しくもなつた。

今日霜田先生、保岡氏、それにもう一人矢張り僕等の先輩の水口氏と三人、止むを得ぬ要件で下山された。

見送り橋(一名涙橋)まで送る。

史光氏が中房の傳説を題材に童話劇を書かれた。それを東京の雜誌社に送る筈だつたが、先生達は既に出發して仕舞つた後なので、大急ぎにその原稿を持つて後を追つた。下り坂をほんとうに飛ぶ様に走つて、中房まで十七町とある松の木少し向ふの小川の橋の上で漸く追ひついた。先生にそれを渡して再び引返す。

静かな山の中に、只一人になると、色々今までの出來事が心の中に新らしく

思ひ起されて來た、東京を立つて今日まで、殆ど山中曆日なしの言葉通り月日も曜日を危く忘れ勝ちなる程、あはたゞしい都會の生活から隔だたつて居たが、其の間に自分は何にかしら自分の今まで知らなかつた或る者を得た様な気がした。

新らたなる天地、別世界、そしてその中に住む神々の姿を自分丈が現實に見た様に思はれた。そして自分を鼓舞する様な強い力を胸の中に感じて居つた。自分は満足と感謝に満ちて、じいつと水の流れを見つめ乍ら、岩の上に坐つて居た。いかに最善の努力を盡しても汲みとる事の出来ない泉が心の底に堪へられてるかの様に、自分には落付いた安心があつた。

そしてつと／＼深く此の偉大な自然の中に浸る事の出来ないのが、寧ろたまらなく心淋しかつた。

あの底知れぬ淵の中へ飛び込んだら、其處には何の苦痛も恐ろしさもなく、楽しい未來がある様な気がして、目に見えない太い綱で引張られる様にも思はれた。

ブラ／＼見返り橋まで歸つて來ると、橋の袂に鶴飼先生が居られて、一力餅を御馳走になる。

午後五時過ぎ山岡先生が單身來房され、それに夜九時過ぎ山嶽隊第三隊の猛者が大元氣で燕から下りて來た。

北アルプスを縦走して無事計畫を遂行された事を祝す。但し其夜は遅く迄其の元氣な談笑に些か安眠を妨害された。

明日燕登山の揭示を見たので、草鞋を買ひ、金剛杖の用意をする等準備怠なく、枕元に備へて早く寝につく。

七月廿八日、晴。燕嶽登山。授業休み。

今朝は四時出發の筈だったが、眠を覺ました時はまだ誰れも白河夜船で寢て居つた。漸く五時十五分、舍を發す。

辨當は竹の皮包の握り飯二箇、山岡先生が留守に残つて、病氣の者の外は皆登つた。鵜飼先生に重ね／＼登山について注意されて居るし、自分は未だ何の経験もないので、殿をつとめてユツクリ／＼登つていつた。然し前の者があまり遅いので、一人追ひ越し二人抜き、一番真先にグン／＼登つて行つた。五年の飯田君等が木の根に休んで居るのにも追ひつき、トウ／＼先登に出してしまつたが、さ程疲れも感じなかつたので休みもせずドロップを噛み乍ら一層馬力をかけて登つた。路に迷ふ心配は無いので、曲りくねつた山路を只上へ／＼はひ上る。

暫らくの間は二年のF君が後に随つて居つたが、いつか自分一人になつて居つた。

突然木鼠が前を横切つて走つた。藪の中にガサ／＼入つて行く小さな獸を見ながら、氣味悪るくも亦面白い事に思つた。それから大聲をはり上げて歌を歌ふ。

あたりには自分より外に一人の人も居ない。自分の聲が四邊の山に反響して物凄くせまつて来る。

ふと目を放つと、左側の狭谷から白い霧がムク／＼昇つて来る。忽ち今迄照り輝いて居た太陽は姿を没して、冷たい風が吹いて来る。茫然として立ち止まつた自分は、いつの間にか全く霧の中につままれて仕舞つて居た。

小さな水滴は目の前に浮游して、魔の様な白い霧は、尙自分の足下を山の端

を廻つて非常な速さで過ぎて行く。

緑の松も美しくしい。お花畑も突出たる岩石も總べて眼界から去つた。周圍數間の物のみが漸く形を辨じられる。

世界から自分一人が切離された様な氣がする。恐ろしさは限りない。然しいつまでこうしてゐても仕様のない事と思つて、後から來る人を待たず、足元を見つめ乍ら、持つて行つた桐油紙を頭からかぶつて登りつゞけた。

と、すぐ近くに山の頂らしいものが、薄くぼんやりと霧の中から見えて來た。頂上だ、頂上だ！ 然し燕の小屋は？ 私はぐるりを見まはした。

左手の岩の蔭に、思つたよりは立派な小屋が一軒低く立つて居て、人の聲が聞こえる。

漸く近づいて中をのぞくと、十二三人の人達が椅子に腰かけて、食事の最中

だ。其中に一人、鼈甲縁の眼鏡をかけてドテラを着た若い岩丈な體格の色の黒いのが、其の間を幹旋してる。其の時氣焰を上げてるナと思つた。其の人が小屋の主人赤沼氏だつたのだ。

壁に粘つた紅茶十錢の廣告を見て、杖とオーバセーターを包んだ風呂敷包を側へ置いて、ガブ／＼暖かい茶のを飲んだ。

もう二三日で八月にならうとする今日、此處アルプスの山上では温い紅茶が何よりの御馳走だつた。

あれ程一生懸命登つたにもかゝらず、一滴の汗も出ない。寒さで振るへる。非常に眺望がいゝと聞いて居つたが、今は一面見えるものは、霧の外に何にもなし。

やがて下君が着き、飯田君達が着いた。丁度二時間で登つた僕は、大いに得

意になつて居つたが、まだ頂上ではなくて、頂上まではもう往復二十分位かゝるのだそうだ。

四五人、飯田君に案内されて行く。途中に二坪程の雪を發見して、大いにむさぼり喰つた。その冷たさは街で賣る氷水の比ではない。

とうとう濃霧の爲に果さず。中途から小屋に引返すと、先の食事中の連中は皆下山して、嬉しげな小登山家達で賑はつて居た。握り飯を喰べ終はつて持つて來た丈のシャツをすつかり着込んで、下山する事にした。鶴飼先生等は未だ登つて來ない。誰れも皆唇を紫にしてブルブル振るへて居たのは、寧ろ滑稽だつた。單身山を降りて、登りに霧の襲來を受けた邊へ來た時には、太陽が少し影を見せて居つたが、又忽ち没する。

然し刻々に霧は霽れて行つた。途中で持參のスケッチブックに、あやしい繪

を四五枚描いて、三時過ぎ舎へ歸へつた。

もう大抵下山して、高山植物の採集して來たのを整理してゐるもの、疲れ切つて仕度も解かず其まゝ横になつてゐるもの、色々だ。游泳池に飛び込んで相變らず元氣なのも居る。僕は一度湯に入ると、足袋と靴下は洗濯しておいて。直ぐ夕飯時まで寝た。

夜頂上の印のある繪ハガキに今日の登山の事を書いて、友人や弟へ便りを書く。

夜日本庭園協會のアルプス觀察隊の講演あり。中途で失敬して、風呂に入つて寐る。

七月廿九日、天候不良。

穂積君山嶽隊より一日早く、今朝下山した。

廿七日 から繪畫の展覽會が開かれてゐる。多くクレイヨン畫で傑作が澤山あつた。某先生の鉛筆畫は評判だ。

油繪が三枚、中一枚は數學の江原先生が「木蔭にて」と云ふ題で清水先生を描いたものだ。(此の繪は僕が先生に頂いて紀念に東京へ持つて歸へつた。)

後は霜田先生の作だ。時々外から浴容がポスターを見て觀覽に来る。

午後二時から山嶽隊部員の講演及び茶話會を催す。

中房名物の一力餅が一皿づゝ。

長野新聞の記者が二人と、百瀬氏が列席された。

夕方同室の清水君がルツクサツクに入れて、ワザ／＼東京から持つて來たクラブをはめて、猛裂にボクシングをやる。満井君とは、互角位だが、S君にはどうしてもかなはなかつた。知らぬ同志の試合は目くら減法大きな手を振り

まわしてばかり居るので、頗る滑稽な見ものだつた。

夜霜田史光氏の「山に關する詩の講話」があつた。

七月卅日、明治天皇祭、學課休み、

起きて戸外に出ると、玄關に國旗が交叉してある。

初めて明治天皇祭である事に氣がつく。ヒラ／＼と風に靡く旗を見て居ると自然敬虔な氣持になつて來た。

朝講堂で式がある。君ヶ代の歌が靜かに力強く、山の空氣を振はして行つた。そして、鶴飼先生から講話があつて、式は終つた。

山嶽隊の人達三人、それにリーダーの伊藤先生、それから昨日まで代數を習つた江原先生も、止むを得ぬ事情とかで下山される。裏の土手から皆んなと一緒に見送る。

十時から立教中學の博物の教師赤沼先生から「遺傳生殖」の講話を聴く。熱心に筆記して居つた人もあつた様だ。十分程休憩の後山岡先生から山の氣象に關する講話がある。

晝飯には、コロツケの御馳走だつた。いつもより少し餘計に御飯を喰べた。

コロツケを解剖すると、曰く、大いさ直径一寸五分、厚さ四分五厘、誰れが調べたのかは知らなう。

夜鶉飼先生からハムレットの話を聞く。

To be or not to be, that is the question.

多田先生、飯田君、史光氏、二年の芝山君等は、一日中否連日、局に對して黙々。飯から飯まで動かうともしない。

七月卅一日、晴

朝の代數は山岡先生が前の講義を繼續してやつて下さつた。

來月四日、史光先生の童話劇『山の神々と少年』を野外劇として公演することになつて、それ／＼臺詞を寫す。キャラクターがきまり、史光先生自ら舞臺監督となる。

僕は劇のヒーローだ。引受けはしたけれども、出来るかどうか、心配だ。試演二回、臺詞の暗誦に努力する。夜七時より『民謡に就いて』史光氏の講話がある。

民謡には、東京を中心として、西よりも北の方に優れたものがある。そして其の數も決して西洋諸國に劣らないさうだ。民謡は古來野のものであつて、座敷のものではなく、江戸時代から墮落し初めたのである。けれども追分節等は今多くの人が考へてる程下等なものでない。

追分と云つても澤山あるが、源は信濃にある。今は恰も北海道がその本場の様であらうが、決してそうではない。

普通オイトコ節と云つて居るのは、實は江戸節であるといふ。

文學的に價值のあるものとして、あげられたものに。

。後影を見んとすれば、

霧がナツ 朝霧が、

* * * * *

人買舟か、うらめしや、とても賣らるゝ身ぢや程に、

靜かに漕ぎやれ もん太どの、

* * * * *

見送りまじよとて、濱まで出たが

泣けて「サラバ」が言へなんだ。

等があつた。

明日は常念登山である。天候が定まらないし、用意も充分整はないので、三年と五年から五人、先生が鶴飼先生に多田先生と二人、以上七人で行く事になつた。

僕は登山用具は、ルックサックすら持たないので、二年組の室へ行つて借り集めて来た。ルックサック、雨合羽、水筒、毛布（此れは自分で持つて行つた。）等、全部揃つたので、賣店で新らしい草鞋を一足、キャラメル、ビスケット等を買つて、ルックサックに詰め込む。

一行共同の荷物として、満井君と僕には眞黒な鍋が一つ宛、清水君には罐詰

が四箇だ。

何にくれとなく準備をして、九時頃寝につく。

二年生其他此の行に加はらない人々は、明日一緒に燕迄登つて、其處で別れる事になつてゐるので、皆んな早く寝た。

今度こそはほんとうに登山の気分になつて、色々な空想を胸に描いて見る。若しか途中でへたばりはしまいか等の心配もないではなかつた。そして醫者に登山の様な激しい運動は止められて居つたのだが、今更そんな事は念頭に置く必要はなかつた。なぜなら、一週間の中房の生活は、僕の頭をすつかり新らしくしてくれたから。

布団をかぶつて寝て居る時、東京に居つて新聞に見た二高の生徒の槍ヶ嶽で惨死した事等も思ひ出されて、身震ひした。然し第一番に頂上に達し様と云ふ

淡い功名心、眼下に見下す景色の雄大さ等想像して、喜びは心の中に禁じ得られなかつた。

同室の三人が皆揃つて一緒に行くのでお互ひに明日の晴天を祈り乍ら、いつか夢路に入つた。

八月一日、終日日本晴。

僕達は何と云ふ幸福だつたらう。全く神様に恵まれて居つたのだ。一點の雲をも残さない此の好い日に、日本アルプスへしかもその重鎮槍ヶ嶽へ登らうとは。燕の途中で樹の間からかすかに小さく見えた槍ヶ嶽の穂先は、一日中一度も雲がかゝらなかつたのだ。

燕の頂上で小屋のおぢいさんに、「おめい方、いゝ日に登つただよ。」と云はれたのも無精に嬉しかつた。

昨日の豫定では、今日中に大天井嶽を越えて、二俣小屋に宿營自炊し、明日常念に登つて歸途に就く筈だったが、途中で遂に鶴飼先生を動かして、槍ヶ嶽まで行く事になつたのだ。

僕等の脚は躍り血は新らたに波うつた。あの巍然と中天を摩して高く聳える槍ヶ嶽の雄姿を見ては、誰れが引つけられない者があらう。

今朝は中房へ来て以來の早起き。先ず湯に入つて、服装をつけたが、寒さの爲にぢつとして居る事が出来ない。服の上へ更に着物を着て、まだ寒い。

太陽はまだ昇らない。朝飯を済ますと、他の人々より一足早く五時、充分に身仕度をして出發した。

合戦澤の小川を渡つて小林區署出張所の前を過ぎると、腹工合が變で時々チク／＼痛み出したので、心配は一通りでなかつた。

皆んなに心配させてはならないと思ふので、平氣を粧つてこらへたが、それよりも、若し痛みが後で劇しくなつて來て一行に別れる事にでもなつたら、どうだと思ふと、今の中に先生に云つて歸へる事にしようかとも考へたり、大いに迷ふ。

ふと思ひ出してポケットのキャラメルを取り出し、二ツ三ツ一緒に嚙んで見ると、不思議にそれきり腹痛は止んでしまつた。

二度目に大きな木の根に休んだ時、皆んなに腹痛だつた事を告げると、鶴飼先生は早速寶丹を取り出して下さつた。然し其の時はもうよくなつた後だつた。

それから大いに元氣を出す。皆んな大いに茶目をやり乍ら登る。教室で試験の成績を心配したり先生の閻魔帳を氣にしたりする氣分は少しもない。全く山

の空氣によつて統一された、等しく山へ登るのだと云ふ、氣持で満たされた。多田先生は一人白い服で仙人の様に、ノソリノソリ登る。それに反して、飯田君は頗る建脚で、いつの間にか近所には姿が見えなくなつた。

燕の中路で後から舍を出た二年生の組に追ひ付かれる。史光先生も白靴で登つて來た。

此の前は、少しも得られなかつた燕の展望は、小屋に達した時、全く聲も出なかつた程ほしいまゝにする事が出來た。遠く長く連なるアルプスの山々は、頂近に白く雪溪を残して、限り無い自然の深さを語るものゝ如く、無言で立つて居る。目を下に向けると、此處は又地獄の底の様な千仞の峽谷が、千古の神秘を抱いて黙々たり。

全く今迄想像だもなし なかつた、言語に絶する偉大その物の姿が、眼前に

現はれた時、自分の心はどんなだつたらう。期待して居なかつた丈、それ丈驚異だつた。あの景色に接した瞬間には、動かない山々の一ツツが躍動して居る様な美を感じた。

目を轉じて信濃の方を望めば、全く箱庭の如き小さな山河が認められる。燕小屋の赤沼氏を煩はして、山々の名を説明して貰ふ。

山上の小高い丘に登つて、近くの大天井、常念等から、乗鞍、槍と指す方を眺めると、奇峯峭然天を衝く。其の英姿、誇らしげに高く聳ゆる槍ヶ嶽を、今更の様にちつと見つめる。あれだ、あの槍の頂上へ、明日の朝はあの穂先で萬歳を叫ぶのだと思ふと、一刻も早く出發したくなつた。五年の三井さんに槍ヶ嶽をバックに登山姿の僕をカメラに入れて貰ふ。相變らず寒いのでカメラを持つ三井さんの手はブルブル振るへて居た。

紅茶を呑んで、充分休息し、此處から歸へる二年の人達と別れて、勇ましく戰場への門出の様に歩を進める。

詩人史光氏は、矢張り山の美に誘はれたのか、僕等と行を共にして槍ヶ嶽へ登る事になつた。

燕岳から暫くの間は平々坦々たる銀座通りの延長である。大天井の麓邊迄それが続く。

一行元氣旺盛、殊に飯田君は常に先導である。

馬の背の様な左右の斜面は、何處までも這松がつゞく。時々深山鳥が人を恐それてか、不意にバタ／＼飛び出す。

東からは温い風が吹いて、太陽がカン／＼照り輝く。が西北の谷からは冷たい風が吹き上げて、濃霧がムク／＼頭をもたげては消える。ほんとうに奇妙な

現像である。有名な銀座街のゲトロ岩(蛙岩)を通る時、鶴飼先生が巧な蛙の鳴聲を真似た。仲々うまかつた。今僕達は常念山脈の縦走をやつてるのだ。

重い荷が自分の背にある事も忘れて、只感嘆の聲を放つ。見るもの觸れるもの總べてめずらしく美しい。

氣高い山の姿を見つめ乍ら歩くので、少しも疲れを感じない。愉快な歩行を續けて行く。

燕を登る時一緒だつた紳士は、強力を先導にズン／＼先に行く。會社員らしいゲートルに編上の若い人が二人、殺生小屋につく迄、後になり先になりして行つた。

銀座通を過ぎて、その境の大きな谷を越すと愈々苦しい難儀な路になつて來た。飯田君は相變らず真先に離れて、其の次が僕だ。腰に結んだ鍋がブラ／＼

して、非常に歩るさにくい。

僕は左程疲れも感ぜず、グント／＼歩るけた。然し罐詰を四つ持った清水君は、此の頃からソロ／＼弱つて來たらしい。大分元氣が無くなつた。トゥ／＼仕舞には罐詰を取り出して、他の人に持つてもらひ、小屋に近くなつた頃にはルツクサツクを史光先生に持つて貰つた。歸へりには僕も大分弱つたが、行きには清水君丈だつた。

大天井の葛折りの石路を登つて、右に別れる。初めの計畫ならば眞直に進んで此の時から一時間内外で目的地に達する筈である。

大天井嶽の横腹を岩にすがり乍ら渡ると、今度は下り坂だ。丁度富士を下るのと同じだそうだ。僕は富士のそれは知らないが、一足踏み出せば五六間一飛びに下つて仕舞ふ。若し走つて勢をつけたら、倒れなければ止まる事が出

來ない。下つた後から石がゴロ／＼ころがつて來るので危い。草鞋の切れる事おびたらしい。

下の方で望遠鏡を借さずに逃げた紳士が辯當を喰べて居る。向ふの山の端へ消えそうになつた飯田君がもどつて來て、お花畠の傍へ寝ころんだ。

こゝで満井君と二人、竹の皮包の握り飯をたべる。

其の中に先生方も皆來て、暫らく此處で休む。晝寝をしたくもあつた。大分からだも疲かれて來たが、これからがほんとうの險路になつて來るのだ。木の根が突出したのにつまづいて、何處か崖の下へ落ちさうになる。一步踏みはずせば、谷底へ落ちなくてはならぬ。その谷の方には、黄色の高山植物が一面に眞盛り。

間もなく雪溪を見つけて、飯田君が雪を取りに下りた。僕は満井君と、ノン

リ／＼の多田先生を先に歩き続ける。

休み回数が段々多くなつて来る。

西嶽の池の邊ではもう水筒に一滴の水もないので、池の水をすまして飲んだ。丁度居合せた強力の人に後どの位でせうと尋ねると、まだ一里半だと云ふ。もう見えさうなものだがと、何處を見ても小屋の影はない。槍の雄姿は近づくに随つて益々神々しく、僕等をさしまねく如く立つ。左の谷底には、轟々と水の流れる音がすさまじい。

愈々東鎌尾根の險路に差しかゝる。最後の努力である。この難所を越せば、小屋はすぐださうだ。

残り少ない元氣を無理に出して、先づ山を下る。三人が休んで、ふと下を見ると、真白な雪溪が大きく横たはつて居る。急に咽の渴くのを覺えて、M君と

二人滑べり下つて、よく見ると、雪溪ではなく白土だ。

腹の立つことおびたゞしい。失望して再び這ひ上る。

多田先生は如何にも雪が欲しそうだ。自分も喰べ度い。反対の側にはと思つて、見ると白いものが横はつて居る。ほんとうに雪かとよく見ると、土ではない様だ。敢然鍋を手に下げて、けはしい絶壁を木の枝にぶら下つて降りる。果して二坪程の雪溪があつた。冷たさ、うまさ、到底形容する言葉も見當らない。時々上の方からオーイと呼ぶ聲が聞こえる。M君だ。オーイと返事をするけれども、聞えぬらしい。鍋の中へ一杯に雪を盛つて、さて上らうとしたがどうしても上ることが出来ない。然しどうしても上迄登らねばならぬ。僕は只無性に足を動かしてのみ居た。横に腹ばいになつて、辛うじて木の根に達したが、上を見ても、茂みが深くて少しも見えない。又オーイと呼ぶMの聲に勵まされ

て漸く木の枝にブラ下つた。今迄は殆ど足のかけ場がなく、苦心したが、もう大丈夫だ。

漸く元の道に達すると、其處へ後の連中も来て居たので、皆して鍋の雪を喰べて休む。かくして吾輩の努力の塊が一行に歓迎されたのは、嬉しかった。

サア鎌尾根を越すんだと立ち上がったが、足は漸くフラ／＼だ。ひきづり乍ら進む。危険な斷崖、岩石の上を越すことも幾回、登つたり下つたり、僅かにはひ出た蔓草にしがみついて、漸く安全な所まで達した。一足進んでは休み休み、「オイ小屋はまだか。小屋は見えないか」とお互ひに聞く。「もう直きだらう。」と誰も同じ様な返事ばかりする。

向ふに休んで居た先の會社員の人が手を振つて、小屋が見えると云ふ。もう今度こそは直きだ。忽ち元氣が出る。路は平坦に、兩側は高山植物で飾られ

てる。Oyatikoyaの立札は素通にして、午後五時二十五分、槍ヶ嶽の肩なる殺生小屋にドツカと腰を下す。中房から約十時間の行程だ。昔獵師の宿だといふ此の小屋には、僕等の一行が最後で、大底着いて今日の冒險該や失敗談に花を咲かせて居た。誰れも同じく小屋を見出しては、馳け出したと云ふ。草鞋をとつて上に上がり、再び外に出て見ると、頭の上に被ぶさる槍の頂には、今霧が立罩めて、刻々に視界から消えて行く。見渡す限り岩石重疊の山の中だ。小屋の前後は雪溪にかこまれて、枯柴がうづ高く積んである。今来た路の方を見ると、一行の後の五人が急いで来る。手を上げてオイと呼んで見る。

寒さは中房や燕の比ではない。ルツクサツクからオーバーセーターや、持つて来た丈のシャツを取り出して、すつかり着込んだが、まだ寒い。爐の火は滅勢よく盛んに燃える。何年振りかで見ると僕には懐かしい思出多きたき火だ。

一同揃つて爐をかこんで功名話しをやる。誰れも皆弱り切つてる。それでも目的の殺生小屋までたどり着いた喜びは、誰れの顔にもあふれて居る。押さえ切れぬ嬉悦の情を焰に映し乍ら話がはづむ。

山に經驗の深い一行中の猛者飯田君は、もう夕飯の仕度に忙がしい。全山一本の木もないので、水の湧き出る様な所もない。だが雪は豊富なので、それを溶かして、大きな桶に溜めてある。遙るか下の方には、白布の様な瀧が二筋落下して居るもの見える。

小さな鍋に八人分の米を入れて煮たので、大失敗。米は鍋から溢ふれて来る。それで二つの鍋に別ける。所が今度は、チットモ火が燃えない。代る／＼涙をこぼし乍ら、ブー／＼吹くけれども、火は燃えない。僕達の手にてあまして、トウ／＼小屋の熊の様なお爺さん達に頼んで、飯と味噌との珍無類の

オチャを煮て貰つた。辛うじて夕飯にありついた甘さ。各々四五杯宛平げる。夕飯が済むと皆ゴロ／＼寝て仕舞つた。

鵜飼先生は、小屋で喜作爺さんに會ふのを口癖に楽しんで居つたが、爺さんは丁度居なくて、其の悴だと云ふ人が居た。宿帳を開いて見ると、東京を第一に各地の學生其他の登山家の氏名が連らねられて居る。東京牛込成城中學校と墨根うるはしく書き込む。

月がいゝので、史光先生と下駄をひつかけて外へ出て見る。穗高の頂高くかゝつた月に雲が走る。静寂の中に、瀧の響のみ聞えて来る。爐端に集まつて、山の話しを聞く人々のせきの聲が時々静けさを破る。雪溪に照る月の光は、眞に何物にも比べべきものがない。史光詩人は絶えず歎賞して止まなかつた。風が寒いので、小屋にはひつて寝る。ブル／＼暫らく振るへて居ると、小屋の人が

更に四五枚の毛布をかけてくれた。色々な事を心に思ひ乍ら、冷たい山小屋の夢をまどろむ。

八月二日、曇り雨降る。歸房。

寒いので早く目を覺す。まだ三時だ。赤々と向ふに火が燃えて、もう話はずんで居る。もう少し寝やうとつとめたが、眠れぬので、起きて話しを聞く。此の邊は禁獵區だが、よくカモシカや兎位は捕れるさうだ。昔は山賊が住んで居つたと云ふ程、成る程石疊みの恐ろしい空ではある。

髭の中から顔の出で居るやうな好々爺に注意されて、僕等は御來光を拜すべく小屋を出た。肩まで登る苦しさ比べて、頂上への崖は割合樂だつた。然しあの二高の生徒は此處で死んだのだ。今朝の話にも、二高生は随分悪く云はれて居つた。小屋の人の忠告を用ひなかつたのださうだ。

二坪はかりある槍の頂上へ一行の眞先に登つて、度胸試めしに、四五分横になり乍ら一同の到着を待つ。

雲の上に浮き出して富士や淺間がはつきりと、指願の中にある。たしかに雲の海とは良く云つたものだと思ふ。今にも白帆が見えさうな氣がする。

海拔一萬四百尺。少くとも日本國中四五位の高さだ。天下でも取つた様な氣がして、心は急に大きくふくらんで、聲の限り叫びたくなる。頂上の小祠は登山者の名刺で一杯だ。

紀念の寫眞を寫して下山する。思ひついて、頂上の石を一箇頂いて、ポケットの中に入れて下る。

昨夜の失敗にこりて、今朝の飯は一切爺さんに頼む。僕等が小屋を出る頃には、先の會社員初皆歸途についた。或者はこれから上高地まで行くといふ。

ゆつくり仕度を整へて、小屋に別れを告げる。上りに苦しんだ東鎌尾根も、下りは案外樂に過ぎた。雪をとりを下つた峠の所で昨日のことを思出す。西岳の池でまた水をのむ。槍ヶ嶽の頂上からあやしい雲が襲來して、此の邊からポツリ／＼雨が落ちる。

少し急いだったので、下り坂に來ると、膝がガク／＼して、足が進まない。疲かれがだん／＼出て來る雨も亦、大天井附近から本降りになつて來た。路は滑べる。二年の人に借りて來た雨合羽が役立つて、早速取り出し着る。

詩人と一緒になつた。大分疲かれて居られるらしい。其の白靴は破れて、指が飛び出してる。

歸への勞れは、少しも不平ではなかつた。

咽が非常に渴いて來たが水は一滴もない。幸か不幸か雨が降つてるので、岩を

つたつて流れる。雫を手にくくつて飲む。ほんとうに少しばかりの水ではあつたが、充分満足出來た。非常に有難くさと思はれた。

喜作新道の盡きる邊で、槍まで行くと云ふ大勢の一行に會ふ。雨に惱やまされて随分弱つて居つた。鎌尾根ではひどい目に會ふだらう。『殺生小屋まで大分ありますか』と聞かれて、まだ一里半位と答へてやつた。

三組程途中で會つたが、皆二俣小屋まで行かうと云つて居た。

燕の優しい姿の頂上が見え初めると、大分安心が出來た。雨も止んだ。晩までかゝつて歸房の豫定だつたが、案外早く、晝迄には大丈夫燕小屋迄歸へれさうだ。燕の頂は見えては居るが仲々遠かつた。

一寸史光先生に待つてもらつて、途中で握り飯をたべる。わき目も振らず燕の頂上のみ目ざして行く。雪溪に下つて暫らく休んで、もう頂上に近い邊へ來

て、後を振り返ると、丘の下に小屋が一軒ある。とうとう夢中で小屋も通り越して仕舞つたのだ。腹が立つ。馬鹿々々しくもある。

小屋に戻つて休む。赤沼さんにも些か笑はれた。

上へ上がつて、史光先生は晝飯を喰べる。燕饅頭と紅茶を貰つて、暫らく望遠鏡をのぞいたりして居る中に、殿の人達も小屋に着く。殺生小屋で作つた杖に焼印をおして貰らふ。約二時間程も小屋で遊んだ。赤沼さんは鶴飼先生と大いに氣焰を上げて居た。來年は小屋にテントを用意して林間學校の人の便利を計つてやらうと云ふ。大變有難い事だ。赤沼さんは、確しかに一風變つた面白い人だ。饅頭もたゞて頂戴した。

漸く立ち上がつて歸途につく。史光先生や多田先生は先に、ズン／＼下りら

れて、鶴飼先生と清水君に僕と三人丈が殿になる。清水君は全く元氣を恢復して、却へつて僕の方が弱つて居る。膝の關節がズキ／＼痛む。鶴飼先生曰く、膝がガク／＼するのは膝が笑つてゐるんだと。登り路も辛いが下りも樂ではな

い。中房が見え出した。小さなお庭の様な部落、温泉の湯氣が煙の様に立ち昇つて居る。

校舎の横にプールが見えて、四五人が中で騒いで居る様子だ。

やつと舎に歸へり着いて、ドツカと玄關に腰を下ろした時は、直ぐ横になり度くなつた。二年の人が二三人、山の様子を尋ねに来る。大變面白しろかつたと言つてやつた。

室にはひつて、M君と話して居ると、山岡先生がお膳にしろこを持つて來て

下さつた。これは麻布の残つた人達が僕達一同の爲にこしらへてくれたのださうだ。

今朝僕が殺生小屋を出たのが八時十分で、舍についたのが三時頃。随分早く着いたものだ。

夜は夕飯が済むと何にも手につかず、直ぐ様寢床にもぐり込む。思へば登山の経験は、僕にとつて初めてである丈に、總べてが印象強く、中房の生活中で特に僕に愉快を興へた記念すべきものであつた。

八月三日 雨降る

三人が言ひ合はした様に何時になつても起き様としない。何度か起こされたが狸寝入りをやつてると、鶴飼先生が本を持って笑ひ乍ら「寝たまゝでもいゝからやらう」と云はれる。あはて、飛び起きて座り直す。

寢ぼけ顔が揃つて、講義を聞いた。三年の他の室から槍へ行つたのは草間君一人丈なので、大分皆んなは同情がない。

代敷が休みだつたので、高山植物をすつかり整理して、トランクの一番底に入れた。猛烈に雨が降つて来て、仲々霽れさうにない。明日は野外劇があるのだ。今日は全部衣裳をつけて本式に稽古をやるのださうだ。幸ひ僕は槍へ行つたそのまゝの姿でいゝので、仕度は楽だつた。

お腹の工合が一寸悪るいから、あまり飯を喰べたくない。何かうまいものが喰べたかつた。然しこの山の中では何にもない。東京の弟や友人から二三通郵便が来てゐた。

北海道のM君に、槍ヶ嶽登山の事を報じてやる。

八月四日 晴天。夜外劇

十五分程英語の授業がある。二頁程残つて居つたからだ。

若し今日も降雨ならば、劇は屋内でやる筈だったが、案外にいゝ天氣になつた。

愈々今日を最後に、二週間の中房林間學校の生活も終をつけて、明日は早朝山を下りる豫定だ。

朝から荷物の整理に忙がしい。二年生の或る者は、昨日既に荷物を送つた。着換へや毛布等をトランクに詰め、制服を着る。バスケットと二つは午前中に發送する。校舎の裏に四五頭の駄馬が繋ながれて、馬子が荷物の目方を量つては馬の背にそれをつける。大きな荷物の大部分は、今日中に全く送られて仕舞つた。

劇は校舎の横で四時から初まつた。腹がまだ少し工合悪いので、すゝまなか

つた、今更變更も願へまい。我慢して出場する。

劇の第一景はテントの傍で演ぜられた。

第二景は岩のあるプールの下でやつた。見物は約二百人もあつたらうと思ふ。初めの中は全く自分で何にをやつてるのか、少しも判らなかつた。そしてどんな容姿で皆んなが見て居るかも見る事が出来なかつた。お猿さんは一等痛快な顔に扮したので、見物人に喝采された。

兎に角噂では可成な成巧だつたと云ふが、心の中では物足らぬ氣もした。然し大きな失敗のなかつた事を祝して満足する。

夕方最後のお別れの茶話會がある。非常な盛會だつた。

十五日間の中房に於ける林間學校の生活を回顧して、私は非常な懐かしさと親しみとを感じる。初めて私に自然に親しむ事を教へて下れたのは中房であつ

た。私は中房に於いて學問的には、英語も數學もどの位進歩したか知らぬが、精神的に私の受けた盛化は大きかつた。私は非常にそれを嬉しく思ふ。

私の頭の中には、中學時代の此の私にとつては、最初の山の生活が深く刻みつけられて、決して忘れることが出来ぬであらう。

燕の山、中房川、林間學校の校舎、それ等はいつも私の記憶の中に新らしく生き返へつて来る。私はあの山の姿が目の前に浮んで来る様な氣がする。山は人間を天國に近づける第二歩だ」と私は云ふ。山登りに何の面白さがあるかなど云ふ人は、先ず一度雲を衝く日本アルプスの山に登つて見るがよい。キツト恐ろしさに身震ひするだらう。山は恐ろしい所だ。然し此の上ない親しい友達であることを悟るだらう。

私は中房に於いて思ひ掛けない物を得て、心からそれを感謝した。

十五日間の中房の生活は決して、無意義ではなかつた。

無言の中に色々の事を私に教へて下れた。私はいつでもそれを思ひ出してあの中房に感謝する。

（以下は非常に淡く、ほとんど不可読な文字で書かれたと思われる文章が続く）

第八章 林間學校が體育に及ぼす影響調査

高山獨特の新清の空氣の中に二三週間を過して、随分運動が多いから林間學校が生徒の體育に何等かの影響が無ければならぬ筈である。大正十二年に調査したのを見ると、確かに此れを證明して居る。

此の調査は身體の各方面に就て詳細の調査をして比較研究する必要が有るが、口尙淺くして各方面の調査はまだ完全で無い。今主として體重の調査を基にして論じて見やう。

此の調査を先づ三部に別つ。第一は林間學校生徒の調査で、第二は同じ位な年齢の本校生徒で、夏休中東京市中にばかり生活して、他所へ出かけなかつたものゝ調査で、第三は前二者を比較研究した調査である。

この三つの調査をする目的で、所要の生徒に五月、七月、八月、九月、十月の半年間に渡つて體重の調査を試みた。生徒数は林間學校生徒が三十三名、在京生徒が二十七名で、前者の中には事情の爲めに調査が完成しなかつた部分のある者が居るから、兩者を比較する時には、各二十七名づゝの同數として、平均して比較した。其の結果は次のやうである。

第一、林間學校生徒の體重變化

- 一、人數三十三名。内五年生三名、三年生七名、二年生二十三名。
- 二、年齢、平均一四、一五歳。
- 三、體重検査の時日。

五月一日、此れは學校全部が春季身體検査をやつた時である。

七月十八日、林間學校へ出發する二日前の日で東京でやつた。

八月五日、林間学校の生徒二週間を終へて、下山し、松本から見學旅行に長野野へ行つて一泊した其の夜、長野旅館で衛つたものである。

三、九月十八日、八月の暑中休を終へて、第二學期が始まり、二週間餘を経過した時である。四、一五歳。

一、十月二十六日、第二學期の略中頃で、秋の半ばだから生徒の變化ある體重がほぼ定まつた時だと認ふ。

四、比較、各人に就いて八月五日の林間學校から下りた時の體重を七月十八日出發前のと比較して増減を調べ、九月十八日のを、八月山から下りた時のと比較し、十月のを九月のと比較し、七月の出發のとも比較し、最後に十月のを五月のと比較して、全體としての體重の増減を調べた。表は三十三名、第二表は其の結果である。

姓名	7月18日	8月5日	9月18日	10月	5月
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33

第一表
大正十一年度林間學校生徒體重表

姓名	年齢	五月一日 (東京)	七月十八日 (東京)	八月五日 (長野)	七月ニシテ 増減	九月十八日 (東京)	八月ニシテ 増減	十月二十六日 (東京)	九月ニシテ 増減	七月ニシテ 増減	五月ニシテ 増減
E.I.	19	13600	13130	13630	500	13950	320	14300	350	1270	70)
T.A.	19	13850	13300	13310	10	13420	110	13800	380	500	50
R.M.	20	14220	13490	14190	700	14460	270	14900	340	1410	680
Y.S.	15	10740	10890	10530	360	10990	460	11010	20	120	270
H.K.	15	12100	12300	11630	670	11920	290	12330	410	30	230
J.A.	15	10090	10010	10200	190	10720	520	10830	110	820	740
T.N.	15	13130	13500	13610	110	13230	380	13750	520	250	620
K.W.	16	12950	12500	12720	220	13290	570	13550	260	1050	600
K.S.	15	13150	12130	12720	590	12340	580	13040	700	910	110
T.M.	16	12290	12530	12990	460	13210	20	13120	90	590	830
S.H.	14	9680	9520	9800	280	10980	1180	10835	150	1310	1160
H.O.	14	8900	8620	8610	10	8900	290	9000	100	380	100
Y.Si.	14	12150	12120	12510	390	12670	160	12960	190	840	810
M.T.	14	11430	11490	11140	350	11900	760	12500	600	1010	1070
F.O.	14	9570	9600	9590	10	9750	200	10300	510	700	730
S.F.	14	7020	7130	7140	10	7690	550	7900	210	770	880
S.A.	14	/	10010	9840	200	10290	450	9130	860	610	/
S.Y.	14	9180	9420	9390	30	10120	730	10490	370	1770	1310
T.Ma.	14	8900	9430	9420	10	9900	380	10140	240	710	1240
K.F.	15	13000	13430	13200	230	13790	590	14320	630	890	1320
T.C.	14	11000	1190	10930	160	11610	680	10900	710	190	100
R.Fu.	15	9090	8730	8620	110	8980	360	9560	580	830	470
S.Fu.	4	8510	8200	8020	180	8590	570	9000	410	800	490
Y.M.	13	11520	11490	10940	550	12390	1450	12440	50	950	920
J.M.	14	9120	9520	9120	400	9770	650	10120	350	600	1000
R.H.	14	8860	9320	9130	190	9100	30	9750	650	430	890
A.H.	14	13500	13620	13540	80	13890	350	13800	90	180	300
T.K.	14	12570	12900	12610	290	13090	480	13750	660	850	1180
M.F.	14	10700	11210	10700	510	12920	2220	12310	610	1100	1610
K.K.	14	9300	9210	/	/	9420	/	9620	200	410	300
J.O.	14	8400	8300	/	/	9260	/	8600	340	300	200
K.H.	14	9000	/	1000	/	11290	290	11300	10	/	2300
S.N.	14	8110	8520	8210	310	8900	690	9050	150	530	910
平均	14.2	10997	10972	10933	39	11423	490	11639	530	667	717

野へ行つて一泊した其の夜、長野旅館で衡つたものである。
 九月十八日、八月の暑中休を終へて、第二學期が始まり、二週間餘を經過した時である。
 十月二十六日、第二學期の略中頃で、秋の半ばだから生徒の變化ある體重が
 ほど定まつた時だと認ふ。
 四、比較、各人に就いて八月五日の林間學校から下りた時の體重を七月十八日
 出發前のと比較して増減を調べ、九月十八日のを、八月山から下りた時のと
 比較し、十月のを九月のと比較し、七月の出發のとも比較し、最後に十月の
 を五月のと比較して、全體としての體重の増減を調べた。
 第一表は其の結果である。

表
体重測定表

氏名	性別	年齢	身長	体重	測定日	測定場所
1	男	17	172	62	7/1	林間学校
2	男	17	170	60	7/1	林間学校
3	男	17	168	58	7/1	林間学校
4	男	17	166	56	7/1	林間学校
5	男	17	164	54	7/1	林間学校
6	男	17	162	52	7/1	林間学校
7	男	17	160	50	7/1	林間学校
8	男	17	158	48	7/1	林間学校
9	男	17	156	46	7/1	林間学校
10	男	17	154	44	7/1	林間学校
11	男	17	152	42	7/1	林間学校
12	男	17	150	40	7/1	林間学校
13	男	17	148	38	7/1	林間学校
14	男	17	146	36	7/1	林間学校
15	男	17	144	34	7/1	林間学校
16	男	17	142	32	7/1	林間学校
17	男	17	140	30	7/1	林間学校
18	男	17	138	28	7/1	林間学校
19	男	17	136	26	7/1	林間学校
20	男	17	134	24	7/1	林間学校
21	男	17	132	22	7/1	林間学校
22	男	17	130	20	7/1	林間学校
23	男	17	128	18	7/1	林間学校
24	男	17	126	16	7/1	林間学校
25	男	17	124	14	7/1	林間学校
26	男	17	122	12	7/1	林間学校
27	男	17	120	10	7/1	林間学校
28	男	17	118	8	7/1	林間学校
29	男	17	116	6	7/1	林間学校
30	男	17	114	4	7/1	林間学校
31	男	17	112	2	7/1	林間学校
32	男	17	110	0	7/1	林間学校
33	男	17	108	0	7/1	林間学校
34	男	17	106	0	7/1	林間学校
35	男	17	104	0	7/1	林間学校
36	男	17	102	0	7/1	林間学校
37	男	17	100	0	7/1	林間学校
38	男	17	98	0	7/1	林間学校
39	男	17	96	0	7/1	林間学校
40	男	17	94	0	7/1	林間学校
41	男	17	92	0	7/1	林間学校
42	男	17	90	0	7/1	林間学校
43	男	17	88	0	7/1	林間学校
44	男	17	86	0	7/1	林間学校
45	男	17	84	0	7/1	林間学校
46	男	17	82	0	7/1	林間学校
47	男	17	80	0	7/1	林間学校
48	男	17	78	0	7/1	林間学校
49	男	17	76	0	7/1	林間学校
50	男	17	74	0	7/1	林間学校
51	男	17	72	0	7/1	林間学校
52	男	17	70	0	7/1	林間学校
53	男	17	68	0	7/1	林間学校
54	男	17	66	0	7/1	林間学校
55	男	17	64	0	7/1	林間学校
56	男	17	62	0	7/1	林間学校
57	男	17	60	0	7/1	林間学校
58	男	17	58	0	7/1	林間学校
59	男	17	56	0	7/1	林間学校
60	男	17	54	0	7/1	林間学校
61	男	17	52	0	7/1	林間学校
62	男	17	50	0	7/1	林間学校
63	男	17	48	0	7/1	林間学校
64	男	17	46	0	7/1	林間学校
65	男	17	44	0	7/1	林間学校
66	男	17	42	0	7/1	林間学校
67	男	17	40	0	7/1	林間学校
68	男	17	38	0	7/1	林間学校
69	男	17	36	0	7/1	林間学校
70	男	17	34	0	7/1	林間学校
71	男	17	32	0	7/1	林間学校
72	男	17	30	0	7/1	林間学校
73	男	17	28	0	7/1	林間学校
74	男	17	26	0	7/1	林間学校
75	男	17	24	0	7/1	林間学校
76	男	17	22	0	7/1	林間学校
77	男	17	20	0	7/1	林間学校
78	男	17	18	0	7/1	林間学校
79	男	17	16	0	7/1	林間学校
80	男	17	14	0	7/1	林間学校
81	男	17	12	0	7/1	林間学校
82	男	17	10	0	7/1	林間学校
83	男	17	8	0	7/1	林間学校
84	男	17	6	0	7/1	林間学校
85	男	17	4	0	7/1	林間学校
86	男	17	2	0	7/1	林間学校
87	男	17	0	0	7/1	林間学校
88	男	17	0	0	7/1	林間学校
89	男	17	0	0	7/1	林間学校
90	男	17	0	0	7/1	林間学校
91	男	17	0	0	7/1	林間学校
92	男	17	0	0	7/1	林間学校
93	男	17	0	0	7/1	林間学校
94	男	17	0	0	7/1	林間学校
95	男	17	0	0	7/1	林間学校
96	男	17	0	0	7/1	林間学校
97	男	17	0	0	7/1	林間学校
98	男	17	0	0	7/1	林間学校
99	男	17	0	0	7/1	林間学校
100	男	17	0	0	7/1	林間学校

第一表の説明

各欄を左から右に見て行くと、各人の各月の變化がわかる。それで第二に氣のつくことは、七月十八日は、夏の始めだから五月一日のに比して、減つた者の多いことである。然し増した者もあり、其の變化は一般學生の初夏に於ける體量の變化である。第二に、八月五日のは山から下りた其の日に長野の旅館で計つたのだ。體量が僅かに増して居るものも有るが多くは減つて居る。そして此の日は今迄清涼な高原に生活して居たものが、急に下界炎熱の一日を徒歩で峠を下り、平地で汗を出し、汽車で蒸されて來たのだから、此の二日の旅だけでも多少體量が減るが當然であるが、林間學校の高原の生活の間は、體量は一般に減ずるものなることが證明される。此れは附録の杏雲堂醫院山岳同人の調査報を参照して見ると、一寸違ふが、彼れは大人の調査で、之れは少年

姓名	身長	体重	増減の割合	備考
101	151	52	2.0	
102	151	52	2.0	
103	151	52	2.0	
104	151	52	2.0	
105	151	52	2.0	
106	151	52	2.0	
107	151	52	2.0	
108	151	52	2.0	
109	151	52	2.0	
110	151	52	2.0	
111	151	52	2.0	
112	151	52	2.0	
113	151	52	2.0	
114	151	52	2.0	
115	151	52	2.0	
116	151	52	2.0	
117	151	52	2.0	
118	151	52	2.0	
119	151	52	2.0	
120	151	52	2.0	
121	151	52	2.0	
122	151	52	2.0	
123	151	52	2.0	
124	151	52	2.0	
125	151	52	2.0	
126	151	52	2.0	
127	151	52	2.0	
128	151	52	2.0	
129	151	52	2.0	
130	151	52	2.0	
131	151	52	2.0	
132	151	52	2.0	
133	151	52	2.0	
134	151	52	2.0	
135	151	52	2.0	
136	151	52	2.0	
137	151	52	2.0	
138	151	52	2.0	
139	151	52	2.0	
140	151	52	2.0	
141	151	52	2.0	
142	151	52	2.0	
143	151	52	2.0	
144	151	52	2.0	
145	151	52	2.0	
146	151	52	2.0	
147	151	52	2.0	
148	151	52	2.0	
149	151	52	2.0	
150	151	52	2.0	

第一表の説明、夏期中原の事柄は詳細に述べた通りである。男子二十二人共十日の各欄を左から右に見て行くと、各人の各月の變化がわかる。それで第二に氣のつくことは、七月十八日は、夏の始めだから五月一日の比して、減つた者の多いことである。然し増した者もあり、其の變化は一般學生の初夏に於ける體重の變化である。第二に、八月五日のは山から下りた其の日に長野の旅館で計つたのだ。體重が僅かに増して居るものも有るが多くは減つて居る。そして此の日は今迄清涼な高原に生活して居たものが、急に下界炎熱の一日を徒歩で峠を下り、平地で汗を出し、汽車で蒸されて來たのだから、此の二日の旅だけでも多少體重が減るが當然であるが、林間學校の高原の生活の間は、體重は一般に減ずるものなることが證明される。此れは附録の杏雲堂醫院山岳同人の調査報を参照して見ると、一寸違ふが、彼れは大人の調査で、之れは少年

の調査である。増した者は重に年齢の長じた上級生と體格の良い下級生の一部で、此等の生徒は山岳の影響に打ち勝つて、更に體重を増したものと想像される。杏雲堂山岳同人は一週間の旅行で有つたが、吾々の二週間で有つた。そしてもし三週間滞在すれば年少者と雖も増すだらうと思はれる理由が他に有る第三、九月十八日のものは大分増して居る。八月に大分減つたのだから、もし九月に更に減るか、或は無變化で居るならば、山の影響が宜しくないといふ事に歸する。然し九月に大分増した所から見ると、山の影響はやがて體重増加の基になるとがわかる。山で體重の減るといふことは、即ちやがて體重に好反動が來ることを豫定して居るものである。三人ばかり八月のに比して更に減じて居るものが有るが、此れには各特種の事情が別に有る。即ち一人は體質が稍虚弱のもので二人は夏休中別の事情で病褥に就いた者である。そして三人共十月に

は體重を恢復して餘程増して居る。

第四、十月廿六日は秋の中頃だから、一般學生の體重は夏以來の變化がほゞ落付いて確定する時で、此の時のは先づ一般に本年の落付いた體重と見て良からうと思ふが、此の時のを前月の九月に比較して見ると、一體に増して居る。然し九月程著しくは無い。此れは山で減つた反動として前月九月迄にうんと増加したから、一月たつて十月にはもうそう著しくは増さぬのが當然だらうと思はれる。然し一般に確かにまだ増して居ることは事實である。減つたものも數名は有るが、大差では無い。

第五、以上で五月始めから十月迄の半ヶ年の變遷がわかつたから、次にこの落付いた十月の體重と比較したのを次欄で見る。此れは即ち山でうけた影響と反動を経て、落付いた結果を初夏の時と比較するわけである。そして其の増加は實

に著しいもので、一貫目以上増したものが七名も有る。其の中で最高が一貫四百多を増して居る。

第六、最後に落付いた十月の體重を學年初めの五月のに比較したのを見ると、此れまた大分増して居る。一貫目以上増加のものが八名で、最高は一貫六百十多も増して居る。減少したものが少數あるが、其の減量は僅少で、此等の生徒も體質が稍虚弱なものである。

第七、次ぎに最後の下の欄を左から右に見る。此れは三十三名の各月の體重を平均したものである。そして五月よりは七月のが少し減り、八月のを七月のに比較すると平均して三十九多だけ減少して居ることがわかる。然し増したもので、ただで三百十五多で、減少したもののだけの平均二百四十四多よりは量が多い。これ僅少量ながら、山に居る間は概して云へば體重の減ることを證明するもの

である。九月のを八月のに比較すると、實に四百九十多の増加で其の増加の率が可なり高いのに驚く。之れが次の十月になつて九月と比較すると、五十三多の増加で、まだ九月の續きで僅少なから増加して居る事がわかる。

次ぎに十月の最後の落付いた體重を登山の前の初夏七月のに比較したのを見れば、平均六百六十七多を増して居る。最後に十月のを各年初め五月のに比較したのを見ると、實に七百十七多を増して居る。之れを以て見れば平均して春より随分體重が増したと言へる。そして身體に受けた影響は可なり大であると言つて良いと思ふ。

第二、夏休中東京に在住したものの體重變化

一、人数 二十七名、三年生十名、二年生十七名。

三、年齢 平均一四、六歳。

三、體重検査の時日。

五月一日、春季身體検査の時。

九月十八日、暑中休暇後第二學期始まつて二週間餘経た時で、林間學校生徒の體重検査日と同じ。

十月二十六日、第二學期中頃で、一般生徒體重の落付く時、林間學校生徒の體重検査日と同じ。

林間學校生徒は更に七月十八日と八月五日とに體重を測つて、山へ上る前と後とを比較したが、東京在住者は此の二回には休中で學校に居らぬから體重を測る事が一寸困難であり、測つても此の短期中彼等は單純な生活をして居たから、大した變化も無からうと思つたので、検査をしなかつた。然し兎に角計つておいて林間學校生徒の同期に於る變化の多い所と比較すれば興味があるだらうが、其れをしなかつたのは残念である。

四、比較、各人に就いて體重の落付いた十月廿六日のと前月九月のとを比較し最後に十月のと學年始め五月のとを比較して、全體としての増減を検べた。

第二表は其の結果である。

第二表の説明。

第一表と同様に見て行つて氣のつくことは

第一、九月十八日のは、暑中休を終つて第二學期初め二週間ばかりたつた時の體重で、大體に於て五月一日のよりは増して居る。然し中には同一のものも有るし、八名ばかりは減少して居る。

第二、十月廿六日のは、體重の落付く時ので、前月九月のに比較したのを見るに、大體に於て少し増して居る。そして其の増加の最大は七百五十匁が二人ある。

第二表
大正十一年夏休中東京在住生徒體重表

姓名	年齢	五月一日 (東京)	九月十八日 (東京)	十月二日 十六日 (東京)	九月ニシテ 比増減	五月ニシテ 比増減
Ho.	15	13610	14330	14750	580	140
Yu.	14	8800	9550	9650	430	850
Ko.	15	10230	10820	10950	30	720
U.	15	11730	11780	12350	620	620
Ta.	15	12800	13000	13750	750	970
I.	17	14410	14740	14440	300	30
K.	15	10530	10600	10670	70	140
Hosi.	14	10490	10000	10300	300	190
Ni.	15	13850	13920	14300	380	450
Mo.	16	14100	13690	14100	410	0
San.	14	8500	8680	8860	180	360
M.	15	8580	9260	9160	100	580
Sak.	15	9860	9890	10350	460	490
A.	14	10200	10540	10870	330	670
Kano.	14	9280	9930	10180	250	900
I.	14	9210	9260	9700	90	10
Kon.	16	12820	13300	12300	0	520
Asa.	14	9480	9770	10190	420	710
Iu.	15	12140	12650	13000	350	860
Ha.	14	8940	8920	9310	390	370
Mr.	14	10490	10870	11340	470	850
Ishi	15	14000	13190	13560	370	440
Ka.	14	12820	12540	13290	750	470
Tsu.	15	13020	12750	12900	150	120
Y.Y	14	10500	11520	11470	100	950
Oka.	14	10040	10900	11440	540	1400
T.	14	8440	9600	8810	190	370
平均	14.6	11068	11228	11498	270	40
					20	20

り、最少は三十名が一人、増減の無いのが一人ある。更に少し減少した者が四人有つて六十名乃至五百八十名である。

第三、最後に十月の落付いた體重を學年初めの五月のに比較したのを見ると、大體に於て可なり増して居る。其の最大量は一貫四百名で、最少量が三十名、増減無いのが一人ある。更に減少したのが五名で、十名乃至五百二十名である。そしてこの五名は二十七名中の五名だから、五分ノ一弱が減少して居ることを注意せねばならぬ。

第四、最後に表を上から下に見て行つて、最後の欄に行くと二十七名の平均になる。それを左から右に見て行つて、平均した各月の變化を見ると、九月のは五月學年始めのより少し増加して居る。十月の落付いた體重は、前月九月のに比して二百七十名を増して居る。然し減少して居る生徒のみを平均して見ると、

二百十匁づゝの減少である。

最後に十月のものを學年始め五月のに比較したものと見ると、四百三十匁の増加で、減少したもののみの平均は一人について二百五十匁である。

以上の調査は、手當り次第に夏休中東京在住者を取つたのだから、年齢だけは注意して、ほゞ林間學校生徒と似たものを選んで、他の體重の點は撰擇なく集めたものである、先づ一般學生こんな年齢の者の平均に近いであらう。

第三、林間學校生徒と東京在住者との體重比較、夏休中都會にのみ生活したものの體重變化の狀況とを比較して見る目的で、前二表に依り各平均を比べて見たものが即ち第三表である。

第三表の説明。

第三表

年齢	五月一日	七月十八日	八月五日 比増減	九月六日 比増減	十月十六日	九月比増減	七月比増減	五月比増減
林間學校生徒平均	14.2	10367	10333 39	11423 490	11639	530	667	717
東京在住生徒平均	14.6	11038		11228	11498	270		430

一、年齢は林間學校生徒が一四、二歳で、都會在住者が一四、六歳だから、都會在住者の方が少し平均して上のわけだが、先づ大體に於て同じ位と見てよろし。

二、五月一日の體重は林間學校生徒の方が僅少量だけ(約七十匁)少いが、大體に於て此亦同じ位なものと見てよからう。

三、七月十八日體重は、都會在住者のは調べが無いから林間學校生徒と比較す

ることは出来ない。

四、八月五日のも同様である。この次には是非調べて見たいものである。

五、九月十八日、即ち暑中休業後、第二學期始めの體重は、林間學校の方が百九十二匁だけ多い、始め五月の時では林間學校の方が却つて少し少なかつたものが、今二百匁近く、増して居るのだから、山の影響の反動が頗る著しく現はれたわけである。

六、十月の定着體重は、林間學校の方が百四十一匁だけ多いことになつて來た。十月のが九月のより増した量は、林間學校は僅五十三匁で、東京在住者の方は二百七十匁増して居る。これは林間學校は前月九月の時に山の影響の反動でうんと増してしまつたから、もう十月にはそう多くは増さぬのが自然である。然し兎に角僅少なれども増した事は事實である。

七、十月のが七月のに對する比例は、東京在住者に調査が無いから見られない。
八、最後に十月の定着體重を五月學期始めのに比較したのを見ると、東京在住者が四百三十匁増して居るのに對して、林間學校生徒は、七百十七匁迄増して居る。以て如何に林間學校が體育に好影響を及ぼしたか、解るであらう。

第四、結論

平均したものに就いて見れば、林間學校生徒は其の二週間の山の生活の間は山の影響と運動の盛んな影響とで、稍體重が他生よりも減するが、九月には反動として著しく増加して、其の増加が十月迄続き、そこで定着して、結局春の時よりは大に體重を増すわけである。山の生活で體重の一時減少することは、林間學校ばかりでは無い。一般の成人と雖も其の例を吾人は多く見て居り、多數の平均を取れば、二週位の生活の後には林間學校と同様の變化を恐らくする

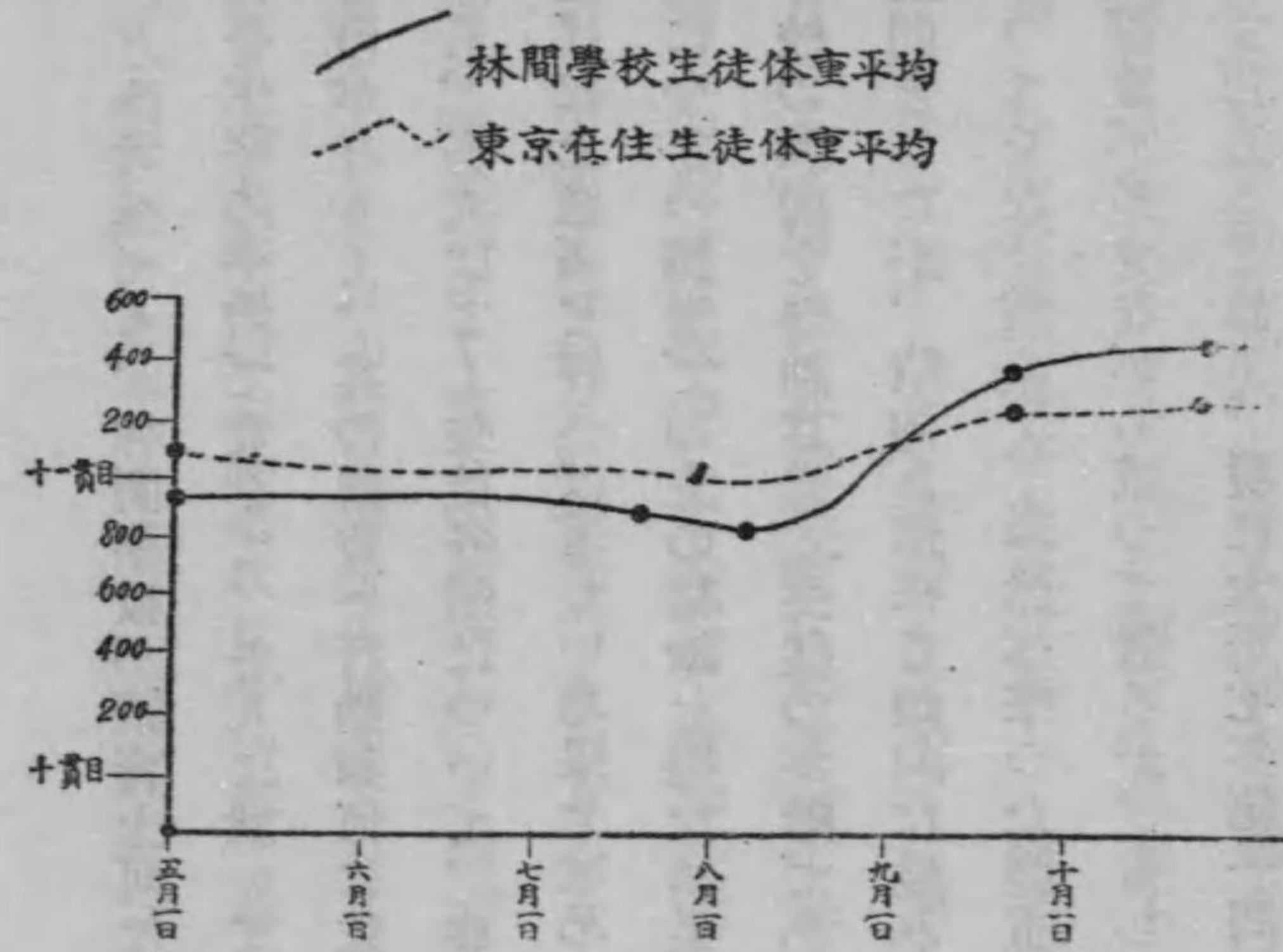
かも知れぬ。然しながら吾人の如上の調査で見れば、更に著しく増加することを豫期するものだから、只の減少とは違ふ。この現象は林間學校生活中に體重を増加した年長者の様子を更に詳しく参考すれば、思當ることが有る。即ち増加者は始めからずん／＼増加したのでは無くて、一時は皆減少の傾向が色んな點で見える。恐らく林間學校に體重計を供へておいて、毎日之れを計つたならば、始めの数日は減少してやがて増加が始り、二週間の後になつて計つた八月五日の測定は、變化を経て來たものなることが解るであらう。只年少者よりは年長者は増加が早く來るのであらうと信ずる。

五月よりも十月の時に體量の減少したものは、東京在住者には多く、多量に増加したのも亦東京在住者には少いが、林間學校生徒には減少した者は極めて僅少で、殆ど無いと言つてもよく、多量に増加した者の多いことは注意すべき現象で、どう考へても、林間學校が體育上可なり有効だと結論せざるを得ない。

更に全生徒の平均でなくて、各人に就いて考へると、如上の増加の傾向が著しいものが有りて、其の體質と行動如何に依つては顯著なる結果が現はれるわけだから、吾人はよく生徒各個について、登山の前に各方面から精細な體質調査を遂げた上適者を伴へば著しい効果を収め得るものと信ずる。

最後に今年の調査で如上の結論を得た結果、更に吾人が問題と考へる點は、林間學校の期間と参加させる生徒の年齢である。我が林間學校では始めは期間を三週間としたが、稍飽きが來る傾向に鑒みて、中途にして二週間として、二年間やつて見た。所が今迄述べ來つた體重の調査を考へると、二週間では平均して體重が多少ながら減つて居るが、もし之れを今一週間續けたら、恐らく餘程増すだらうと思ふ。現に大正七年第一回の林間學校は、三週間で、體重が

第四表
林間學校生徒及東京在住生徒体重平均比較表



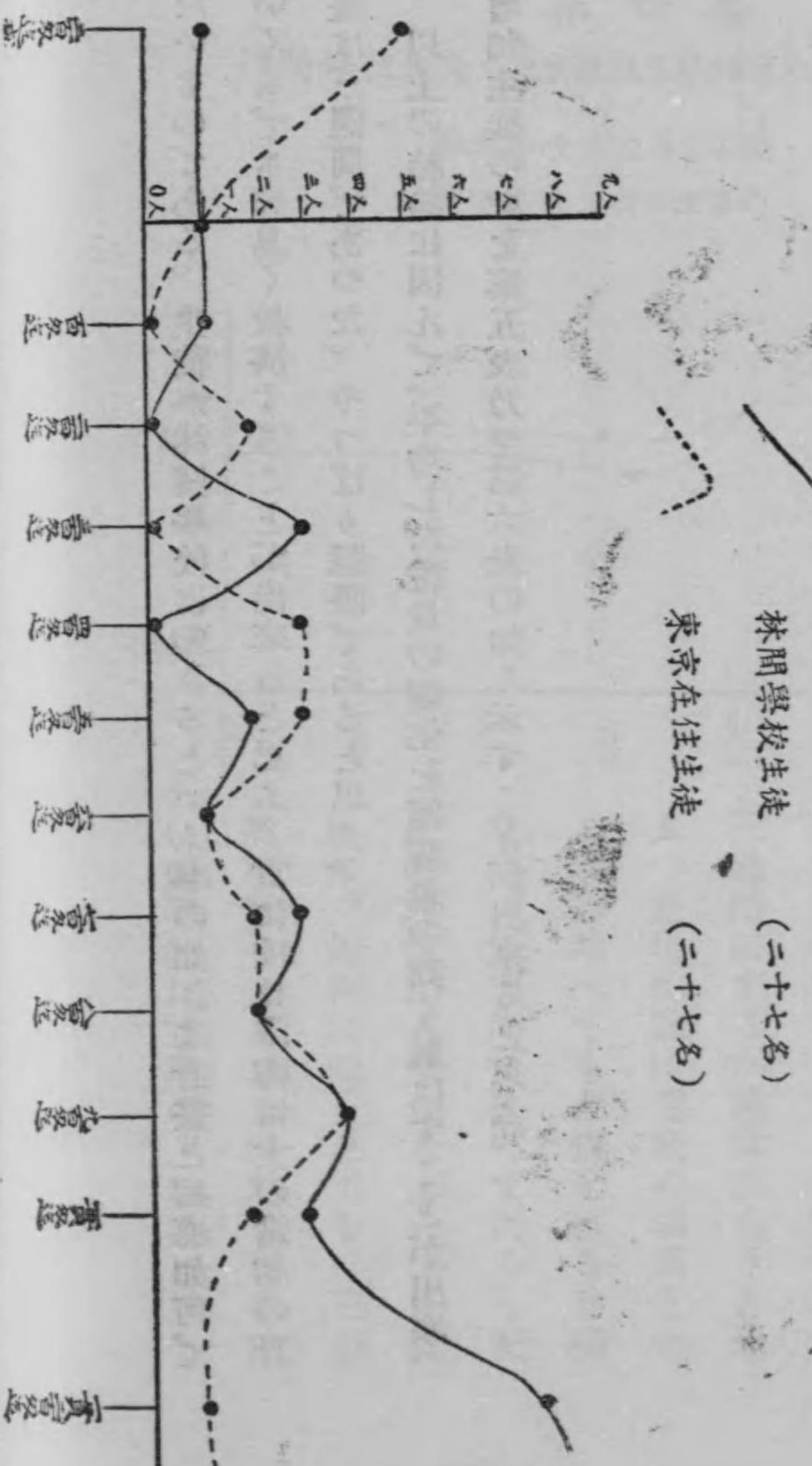
出發の時よりは稍増して居る。だがら眞に體育に充分の効果を有らしめやうとするにはせめて三週間にするが適當だらうと思ふ。更に此點は温泉の効果といふ事を考へても主張せざるを得ない。二週間では、まだよく充分の機能が人體に及ぶとは思はれぬ。如何に短く見ても、三週間に欲しいと思ふ此點も科學的に醫學的に實驗の上結論に達し

たいものである。生徒が林間學校に飽きるといふ事の如きは計畫と指導如何でいくらでも容易く救済することが出来ると思ふ。實に校長澤柳博士の當初の計畫は三週間であつた。やつぱり慧眼であると思ふ。

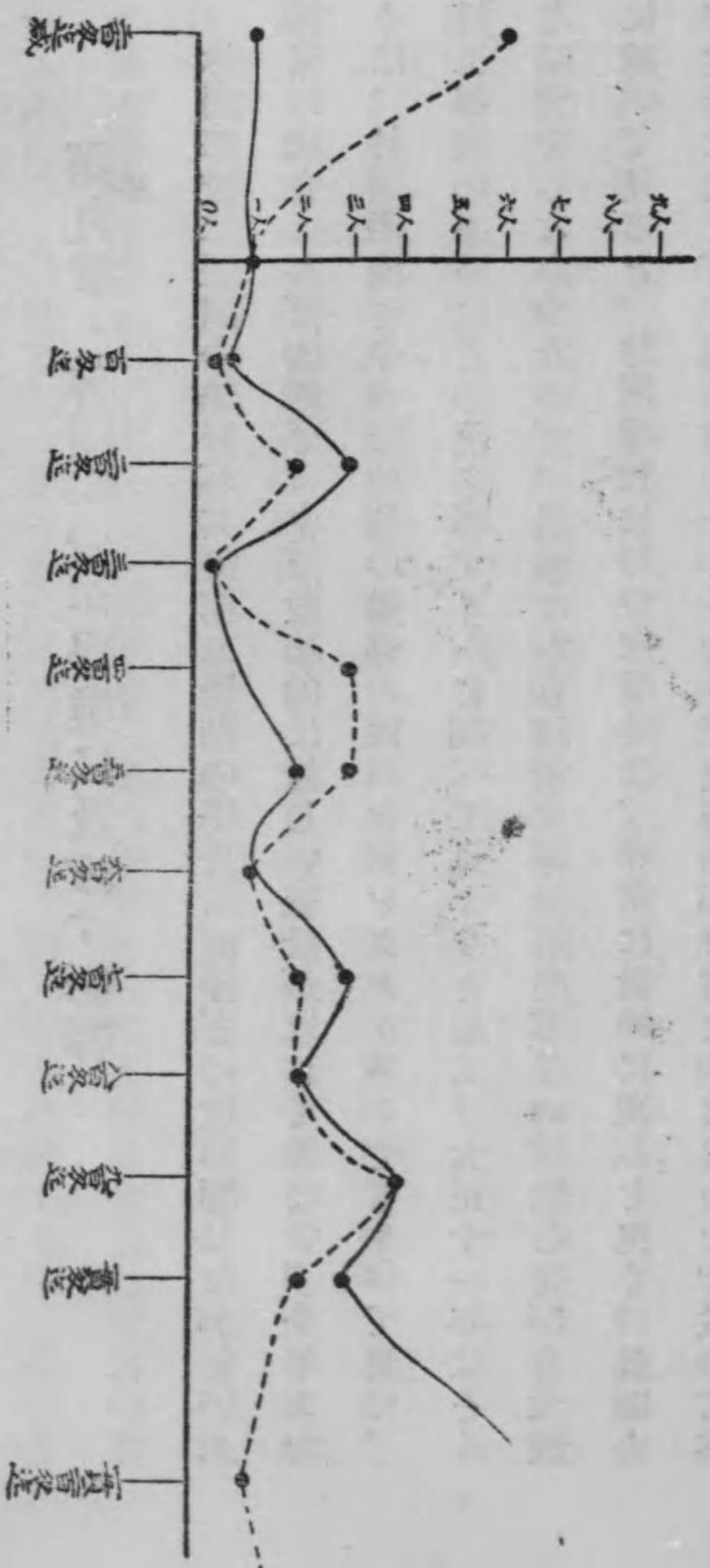
以上の結論に因んで、平均した體量の變化を第四表の如く表はすことが出来、増加生徒の數を第五表乃至第六表の如く示すことが出来ると思ふ。

日本アルプスと林間學校

第五表 五月ノ体重ト十月ノ体重ト比較シテ十月ニ増シタル数ト人数ト關係



第六表 (第五表ノ概要)



第九章 林間學校が學業に及ぼす影響

林間學校二週間の學習が其後第二學期の學科に直接どの位影響したかといふ精密の調査は甚だ困難で、まだ數學的に精しい統計が取れて居ない。今年あたりは、林間學校でやつた種類の勉強の能率をメンタルテストでもやつて見て、第二學期の學修にどの位影響するかを調べて見ようと思ふ。大正十一年はそんな研究をしなかつたので、遺憾ながら細密な報告が出来ない。然しながら大體に就いて見ると、林間學校に行つた生徒は、非常に教師に親みを抱く、教師も亦生徒に親んで、其の個性をよく知り、取扱ひが非常に樂になつた。従つて其の生徒は少くも其の學科に就て、第二學期に於ては、學習が餘程た易すくなつた事は、生徒各自が自白して居る。此れは一部の學科に就てゝ有るが、斯う

いふ氣持になることが、非常に生徒の生活には有利なことで、従つて全體の學科の學習も多く活氣が付いて來ることになるものであるから、直接影響が數學的に現はれないにしても、何所かに確かに影響は有るものと思ふ。ことに訓育の方面では目立つて効果が有つたと言つてよいと思ふ。吾人はこんな經驗を少くも一年に一回位は全級の生徒に何所かで與へたくてならぬが、多數の生徒では仲々さう徹底しない。

さて次に參考の爲めに、第一學期、第二學期、第三學期の學業成績を英語と數學とに就いて調べ、林間學校生徒と在京在住の生徒とに分離して見た。其れは次ぎの二つの表の通りである。そして此の二表を比較して見ると、統計に於て林間學校生徒の方が在京生徒よりも、第二學期に於て成績の向上した者の數が遙かに多く、低下した者の數が極めて少ない。第三學期に於ても第二學期よ

り向上した者の數が林間學校生徒の方が多くて、低下した者の數が少い此れを直接林間學校の影響とばかり判断するのは、餘りに早計に失するから、吾人はさういふ斷案は下さないが、兎に角先に體重比較に取つた同一の生徒に就いて比較した者が次の表である。

第七表、第八表、の説明。

林間學校では最も多くの時間を英語と數學とに費したから、此の二學科に就いて調べて見た。學期末の成績は英語が二つに別れて居り、數學が上級生は代數幾何となつて居、下級生は代數だけだから、其のまゝ取つた。

各人に就いて、各學科について、左から右へ甲乙乙とあるは、第一學期、第二學期、第三學期の成績がそれ／＼甲乙乙の意味である。そして右から二番目の欄は第二學期の成績が第一學期よりも進歩したものには、上とつけた。低下し

第七表
大正十一年林間學生徒學業上下表

姓名	英語一	英語二	代數	幾何	リリ	
					上下二學期	上下三學期
E.I.	乙乙乙	乙乙乙	乙甲乙	乙甲乙	上上	下下
T.A.	乙乙甲	乙乙乙	甲甲甲	乙乙乙		上上
Y.S.	乙乙乙	乙乙乙	乙乙乙	乙乙乙		
H.K.	乙乙甲	甲甲甲	乙甲甲	甲甲甲	上上	上上
J.A.	乙乙乙	乙乙乙	乙乙乙	乙乙乙		
T.N.	甲甲甲	甲甲甲	甲甲甲	甲甲甲		
K.W.	乙甲甲	甲甲甲	乙甲乙	乙甲甲	上上	下下
K.S.	乙甲甲	甲甲甲	乙乙乙	乙乙乙	上上	下下
T.M.	乙乙乙	乙乙乙	乙甲甲	甲甲甲	上上	
J.O.	乙乙乙	乙乙乙	乙一	一		
K.H.	乙乙乙	乙乙乙	乙乙乙	乙乙乙		
S.H.	乙乙乙	乙乙乙	丙乙乙	乙乙乙	上上	上上
H.O.	乙乙乙	乙甲甲	乙甲甲	乙甲甲	上上	上上
Y.Si.	乙乙乙	乙乙甲	丙乙乙	丙乙乙	上上	上上
M.T.	乙乙乙	丙乙乙	丙乙乙	乙甲甲	上上	上上
F.O.	乙乙乙	乙乙乙	乙甲甲	乙甲甲	上上	上上
S.F.	乙乙乙	乙乙乙	乙甲甲	乙甲甲	上上	上上
S.A.	乙乙乙	乙乙乙	乙甲甲	乙甲甲	上上	上上
S.Y.	乙乙乙	丙乙乙	乙乙乙	乙乙乙	上上	上上
T.Ma.	乙乙乙	乙乙乙	乙乙乙	乙乙乙	上上	下下
K.F.	乙甲乙	乙丙乙	乙乙乙	乙乙乙		
T.C.	乙乙乙	乙乙甲	乙乙乙	乙乙乙		
R.Fu.	乙乙乙	乙乙甲	丙乙乙	丙乙乙	上上	上上
S.Fn.	乙乙乙	乙甲甲	乙甲甲	乙甲甲	上上	上上
Y.M.	乙乙乙	乙乙甲	丙乙乙	丙乙乙	上上	上上
J.M.	乙乙乙	乙乙乙	乙乙乙	乙乙乙		
R.H.	丙乙乙	丙乙乙	丙乙乙	丙乙乙	上上	上上
A.H.	丙乙乙	丙乙乙	丙乙乙	丙乙乙	上上	上上
T.K.	乙乙乙	乙甲甲	乙乙甲	乙乙甲	上上	上上
M.F.	乙乙乙	丙乙乙	乙乙乙	乙乙乙	上上	下下
S.N.	乙乙乙	丙乙乙	乙甲甲	乙甲甲	上上	
K.K.	丙乙乙	乙乙乙	乙乙乙	乙乙乙	上上	上上
合計					上下 34	上下 97
上下相殺シテ					上 33	下 97
上下相殺シテ上リモノ						
人数			27人	上二ツ 17人	上三ツ 5人	上三ツ 2人

第八表
大正十一年東京在往者學業上下表

姓名	英語一			英語二			代數	幾何	上二學期		下二學期	
	上	中	下	上	中	下			上	下	上	下
Ho.	甲	甲	乙	甲	甲	甲	甲	甲	甲	上	下	下
Yu.	乙	乙	丙	丙	丙	丙	丙	乙	乙	上	下	下
Hi.	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	甲	甲	上	上	上
Ko.	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	甲	甲	上	上	上
S.i.	丙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	丙	乙	上	上	下
U.	乙	乙	乙	乙	乙	乙	丙	甲	乙	上	上	下
Ta.	乙	乙	乙	甲	甲	甲	乙	甲	乙	上	上	下
I. O.	乙	乙	乙	甲	乙	甲	甲	甲	甲	上	上	上
K.	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	上	上	上
Hos.	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	下	下	上
Ni.	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	下	下	下
Mo.	丙	丙	丙	丙	丙	丙	丙	丙	丙	下	下	下
San.	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	下	下	下
M.	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	下	下	下
Sak.	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	下	下	下
Iwa.	了	乙	乙	甲	甲	甲	乙	乙	乙	下	下	下
A.	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	下	下	下
Koas.	乙	甲	甲	乙	乙	乙	丙	乙	甲	上	上	上
Is.	乙	甲	甲	甲	乙	甲	乙	乙	乙	上	上	上
Koma.	乙	甲	甲	乙	乙	乙	丙	丙	丙	下	上	下
Kon.	丙	乙	乙	乙	乙	乙	丙	乙	乙	下	上	下
As.	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	上	上	上
Fu.	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	上	上	上
Ha.	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	甲	甲	上	上	上
Mo.	甲	甲	乙	乙	甲	乙	乙	甲	甲	上	上	下
Ishi.	乙	甲	甲	丙	乙	乙	乙	乙	甲	上	上	下
Ka.	丙	乙	乙	丙	乙	乙	丙	乙	乙	上	上	下
Tsu.	乙	甲	甲	乙	甲	甲	乙	乙	乙	上	上	上
Y.	丙	乙	乙	丙	乙	乙	乙	乙	乙	上	上	上
Ok.	乙	乙	乙	丙	乙	乙	乙	乙	乙	上	上	上
T.	丙	乙	乙	丙	乙	乙	丙	乙	乙	上	上	上
合計									上 32	下 11	上 5	下 11
上ト下ヲ相殺シテ									上 28	下 7	上 5	下 12
上ト下相殺シテ上リシ者、人數									15人	上ニツ4人	上ニツ9人	上ニツ2人
下リシモノ、人數									4人			

日本アルプスミ林間學校

四三〇

た者には下とつけた。同じ成績ならば何もつけなかつた。もう少し細かく言へば、

第一學期に乙で、第二學期に甲となつた者には上、
 第一學期が甲で、第二學期が乙の者には下、
 第一學期が乙で、第二學期も乙のものには何もつけず、其他此れに準じた。
 丙の點は落第點だが、第一學期に丙で、第二學期に乙によつた者には上を
 け、甲に一躍したものには上を二つつけた。第一學期丙で、第二學期も丙の
 ものは不成績で進歩せぬわけだから此亦下とつけた。
 之れが四科目(或は三科目)に別れて居るから、上や下が二つ或は三つつくこ
 とにもなる。上と下がつくことも有る。

最も右端の欄は、第三學期の成績を第二學期のに比較して同様に取扱つたもの

である。

次ぎにずつと下の欄で合計と有る所には、右端に上述の上下の合計を書いた。最も下の欄では、上一つ下一つを相殺して、結局上つた者と下つた者との數を統計して見た。それが第七表では、上の數が三十三で、結局上たもの、數が二十七人、上を一つ得た者は十七人、二つ得た者が五人、三つ得た者が二人で、結局下つた者は皆無といふ事になつた。第八表では上を得た者の總數が十五人で、上つ得た者が四人、二つ得た者が九人、三つが二人で、結局下つた者が四人迄有る。

第十章 中房を中心とする植物

第一、七八月頃中房近傍に咲く花。(五十種)。

これは大正十年八月初旬、林間學校開催中、自然科學科教授の際、第一高等學校講師兼成城中學校教諭和田八重造氏が採集したもので、温泉場附近で最も著しく人目に觸れるものである。

薔薇科、ワレモカウ、ダイコンサウ、カハラサイコ、サハヒヨドリバナ、
菊科、ウスユキサウ、ニガナ、シロバナニガナ、ヤマハ、コ、ノブ
キ、シラン、コウゾリナ、
唇形科、アキノタムラサウ、ミヤマウド、ヤマハツカ、イブキジヤコウ
サウ、ウツボグサ、

百合科、ギバウシ、タケシマラン、ツバメオモト、キバナノホト、ギス、
 ノカンヅウ、
 毛茛科、クサボタン、アハモリシヨウマ、
 虎耳草科、ノリウツギ、イタドリ、サハアヂサヒ、
 茜草科、サルマバムグラ、カハラマツバ、
 金糸桃科、オトギリサウ、トモヘサウ、
 繖形科、シ、ウド、ウマノミツバ、
 堇菜科、コマツナギ、ミヤコグサ、
 玄參科、クカイサウ、
 蕁麻科、アカソ、
 合布科、リヨウブ、

敗醬草科、ハクサンオミナヘシ、
 石竹科、カハラナデシコ、
 桔梗科、ホタルブクロ、
 茄科、コナスビ、
 龍膽科、オヤマリンダウ、
 牻牛科、フウロサウ、
 鴨跖草科、ツユクサ、
 蘭科、モチズリ、
 山菜萸科、ゴゼンタチバナ、
 柳葉菜科、アカバナ、ヤナギラン、

第二、次に掲げるものは大正九年から十一年迄の間に、七月下旬燕岳で鶴飼教

論と三年生安藤讓典とが採集したもので、大部分高山植物である。多少は常念山脈及燕岳山服のものもある。一切を盡したわけではなく、著しく目につくもののみである。採集した中で、前掲のものは略省く。

菊科、タカネヨモギ、タカネウスユキサウ、ウサギバク、ミヤマウスユ

キサウ、カニカウモリ、ミヤマアヅマギク、ミヤマカウゾリナ、ハ

ンカイサウ、タカネアザミ、シホガマギク、

毛茛科、シナノキンバイ、カラマツサウ、ヒメカラマツサウ、サラシナ

シヨウマ、ヤマブキシヨウマ、ミヤマカラマツサウ、モミヂカラマツ、

ハクサンイチゲ、ミヤマオダマキ、セリバオウレン、ミツバワウレン、

ミヤマキンポウゲ、

景天科、イハベンケイ、ミヤママンネングサ、

桔梗科、チシマギキヤウ、ホタルブクロ、

百合科、ヤマホト、ギス、シヤウ、バカマ、マイヅルサウ、ツバノオ

モト、チゴユリ、クルマユリ、ウラジロタデ、ユキザ、タケシ

マラン、チシマゼキシヨウ、

蘭科、ハクサンチドリ、ハクサンオミナヘシ、タカネトンボ、イチエウ

ラン、キンラン、ギンリヨウサウ(ユウレリサウ)、チドリサウ、ネ

バリノギラン、ミヤマフタバラン、アリドウシラン、

薔薇科、ミヤマダイコンサウ、チングルマ、キンロバイ、ナ、カマド、

シモツケ、

牻牛兒科、アカスマフウロ、タケフウロ、

金糸桃科、シナノオトギリ、シヤマオトギリ、イハオトギリ、

堇菜科、キバナノコマノツメ、イチゲキスミレ、タカネスミレ、オホ

バキスミレ、

柳葉菜科、イハアカバナ、ミヤマオンタデ。

繖形科、ハクサンサイコ、ヤマウイキヨウ、

忍冬科、オホヘウタンボク、

鹿蹄草科、コバナノイチヤクサウ、ホソバナノイチヤクサウ、マルバイチャ

クサウ、ベニバナイチヤクサウ、イチゲイケヤクサウ、

石南科、ウラシマツ、ジ、アカモノ、シラタマノキ、ツルコケモ、ア

ヲノツガザクラ、ツガザクラ、シロバナシヤクナゲ、キバナシヤクナ

ゲ、クロマンノキ、コケモ、

岩梅科、コイハカバミ、イハカバミ、イワウソ、

櫻草科、ツマトリサウ、オホサクラサウ、

龍膽科、ツルリンダウ、タウヤクリンダウ、フデリンダウ、ミヤマリンダ

ウ、タテヤマリンドウ、

玄參科、キバナシホガマ、ヨツバシホガマ、ユキワリシホガマ、ミヤマ

シホガマ、ヒメクワガタ、ミヤマクワガタ、オオバミゾホウヅキ、

茜草科、キバナノカハラマツバ、

石竹科、イハツメクサ、タカネミ、ナグサ、ミヅスギ、タカネツメクサ、

ミヤマツメクサ、

石松科、ヒメスギラン、タカネヒカゲノカヅラ、コスギラン、

水龍骨科、イハガネゼンマイ、ナヨシダ、ミヤマワラビ、ミヤマワラビ、

ジ、ガシラ、

燈心草科、ミヤマキ、
 蓼科、ミヤマタニソバ、ムカゴトラノヲ、スイバ、ミヤマギシ、
 イブキトラノヲ、タニタデ、オンタデ、
 罌粟科、コマクサ、ヲサバグサ、
 茅薺菜科、マウセンゴケ、
 虎耳草科、ヅダヤクシユ、ウメバチサウ、シラヒゲサウ、クロクモサウ、
 松杉科、ハヒマツ、コメツガ、
 禾本科、ヤマアハ、ミヤマストメノヒエ、ミヤマアハガヘリ、
 千加菜科、エゾミノハギ、
 十字科、ミヤマハタザラ、
 地衣科、カプトゴケ、イハブスマ、ハナゴケ、

琴柏科、クラマゴケ、ハナゴケ、ミヅゴケ、
 岩高蘭科、ガンコツラン、
 樺木科、シラカバ、ミヤマハンノキ、

附 録

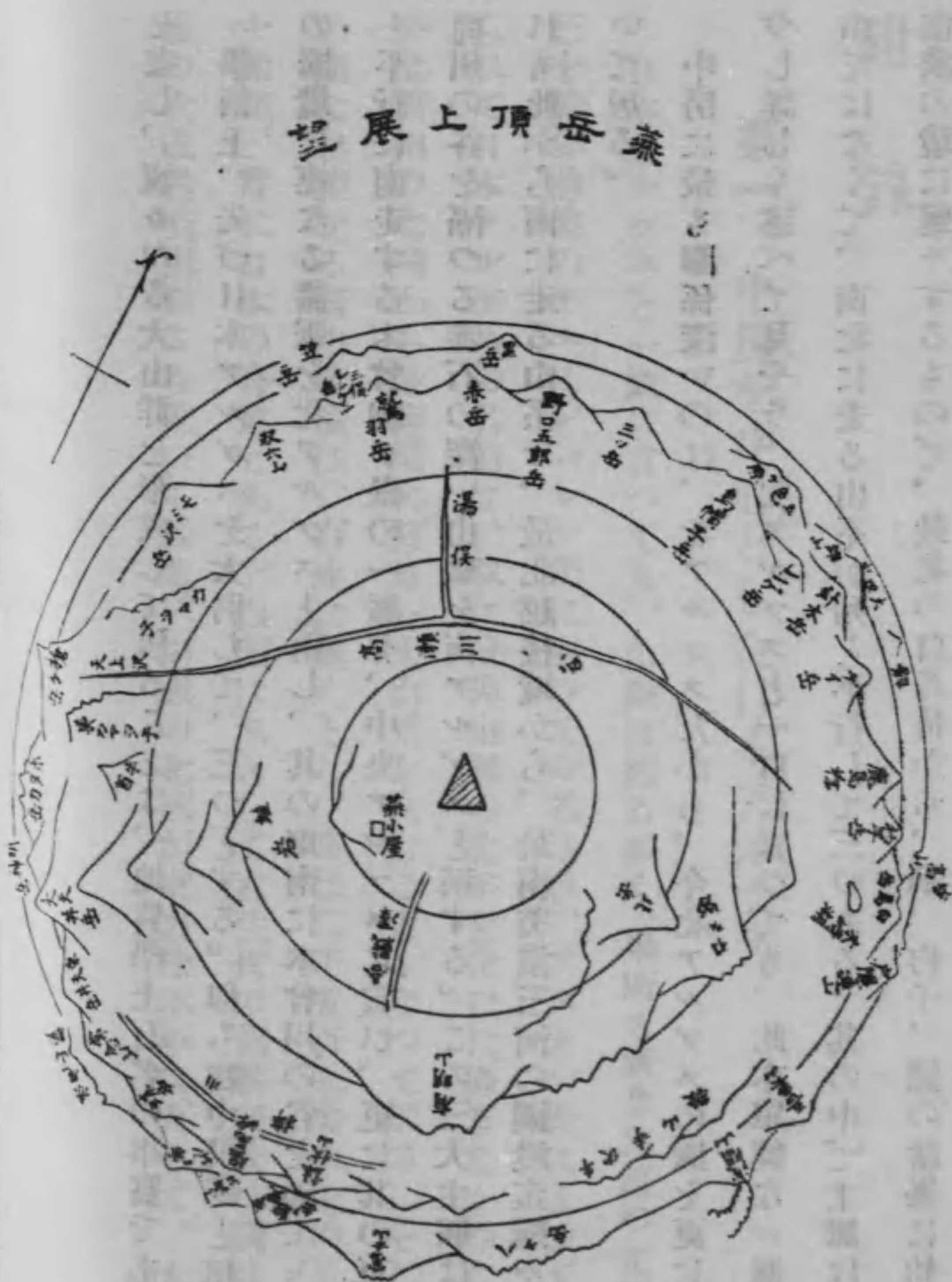
第一 中房を中心とした日本アルプス

日本アルプスと一概に言つても、山脈は頗る多く、場所も廣きに渡つて居る。三十餘年前彼のチエインバレン氏に依つて命名され、アストン氏によつて廣められて日本アルプスの名前は、單に飛彈山脈の北半を含むに過ぎなかつたが、今は信州の北端から最南端に渡る一大山系を含むこととなつて居る。そして此の間に昇羅せる高山峻嶺は、百座に垂んとし、高さ二千五百米突以上のもの四十餘座、實に日本の脊梁である。山脈は主として古生代の褶皺層及び同時代以後の火成岩噴出岩より成つて居る。山脈の北部が東方松本平に而して、大斷層

をなし、巍々たる大山群を形成して居ることは、地質學上有名の事實である。

學術上、先づ日本アルプスを大別して、三つとする。即ち越中飛彈と信州との國境に連なる諸脈を北アルプスと稱し、其の東南に木曾川の谷を隔て、此れと平行に南走する木曾駒ヶ嶽の一脈を、中央アルプスと言ひ、更に其の東に天龍川の谷を隔つる赤石の深い山脈を南アルプスと稱する。この三大主脈は、何れも此から南に走る山系で、最北越後境から、最南美濃三河の國境迄蜿蜒々と續いて居る。

中房に最も關係深いのは、北アルプスだから、今北アルプスの脈を更にもう少し詳しく述べて見やう。北アルプスと一口に言つても、此亦單純な一脈の連山ではなくて、南北に走る山系が殆ど平行して三つある。其の中で主脈は越中信濃の境に蜿蜒するもので、最北の白馬岳から、劍・杓子、鎚の諸峯に始まつ



て、五龍嶽、鹿島槍嶽、爺嶽から針ノ木岳、針ノ木峠、蓮華嶽に連り、南に延びて、烏帽子嶽、三ツ嶽、野口五郎嶽に連り、赤牛嶽、黒嶽、赤嶽を合せて、鷲羽嶽、三俣蓮華嶽、双六嶽、縦澤嶽から最高の主峰槍ヶ嶽につゞいて居るのを飛騨山脈といふ。別に西北の方越中の立山連峰から南に走る所謂立山脈が、槍ヶ嶽に合して居る。更に信州松本の平に最も近い山脈が唐澤嶽、俄鬼嶽、燕嶽から大天井嶽、東天井嶽、常念嶽につゞいて、蝶ヶ嶽を経て南方上高地の邊に接續して居るのを常念山脈と稱へて居る。常念山脈は大天井から東鎌尾の一脈で主峰槍ヶ嶽にもつゞいて居る。槍ヶ嶽から南には、直ぐ穂高嶽の連峯が巍々として蟠り、乗鞍嶽、御嶽の高峯に連つて、美濃境迄走つて居る。

だから北アルプスを大觀すれば、槍ヶ嶽を中心とする肉刺^{フオリー}の形で、南から御嶽、乗鞍穂高の一連が其の柄となり、槍嶽から北に向つて三つの叉が出て居る

わけで、白馬、針ノ木、双六の主脈飛彈山脈が中央の又で、一番長く太く、西の立山山脈と東の常念山脈が左右にや短い又をなして居るのである。

我が中房は、常念山脈の峻峯蕨嶽と其の東に稍獨立しかけた有明山との連る谷間にあるのである。

これで大體北アルプスの大觀が解つたから、此れから中房を根據地として、附近の登山の概様を述べて見やう。

一、根據地中房温泉場

中房温泉場は客舎が幾棟も有つて、皆場主百瀬氏の經營に係る。そして右に旅客四百人を收容するに足りる。百瀬氏は熱心の山嶽研究家で、親しく前人未踏の山谷を幾度か踏破した經驗家である。此の温泉場では普通の温泉浴客も頗る有效な氣持よい生活が出来るが、更に登山客の爲めには得難い便利を與へて居る。

近來立派な案内者も用意し、萬端登山の準備を整へて居る。此所で養成された案内者の中に、小林喜作といふ名案内が居たが、大正十二年の春まだ淺い頃、爺嶽附近に出獵して、一夕雪崩の爲めに、親子諸共山小屋の中で不慮の死を遂げてしまつたから、今は見られない。温泉場の直ぐ下の餅屋の主人、島山善作といふが、今は極めて有力な案内で、生命を托するに足りる男である。信濃坂の茶屋の主人も、嘗て中房の銅像四十貫を單身有明から負ひ上げたといふ剛の者である。其他案内は可なり澤山出る。彼の上高地の如き、どうも案内不足を訴へられて居るが、中房からはやがてずつと豊富な登山客が出る都合になるであらう。ことに常念山脈、槍嶽方面の登山には此所が極めて便利の根據地となるであらう。百瀬氏は登山客の爲めに、特に案内人をして暴利を貪らしめぬ方針を嚴守して居るから、他所で見るとやうに規定の毎日の賃銀の外に、煙草代とか、

酒手とか、草鞋代とか言つた豫定外の金錢を取られる不快を登山客は此所では感ぜぬ筈である。

食料、草鞋、金剛杖は元より、諸般の登山準備が逐年整つて来る。近年成城林間學校の應援に係る氣象觀測所が出来たから、天候の豫測が正確に出来て登山者が便利を得る日も、近い中に来るであらう。旅舎には洋館もあり、洋式の部屋もあり、多少の洋食も出来るから、外人の宿泊登山にも便利であらう。學生の如きで有れば、自炊も出来、食器も借して呉れるから、極めて經濟的の宿泊が出来る。一般客の食事は尙ほ改良を要するが、此れもやがて理想に近づくであらう。

元來此所は温泉場だから、こゝに數日間滞在して、山地の氣候に馴れ、天候に經驗を積み、温泉に浴しながらゆつくり山に身體を馴らし、所謂登山準備の

出来た健康になつてから、天候を見定めて、諸峯縦走の途に上るは、經驗少い人には賢い方法である。林間學校々舎の一部には、寫真現像用の暗室も設備してあるから、先づこゝで山の寫眞の練習でもして行けば、非常に有益である。幾日の縦走を終へて、こゝに歸着して旅塵を出湯にゆつくり洗ふことは何と云つても温泉場の長所で、極めて愉快なことである。

温泉場主百瀬氏は前述の通り山嶽研究家だが、ことに常念山脈、喜作新道、槍ヶ嶽、湯俣、濁澤の方面は精通して居る。先年燕嶽から高瀬の谷へ直下して、湯俣を鷲羽嶽へ登つた經驗が有り、今年六月には東澤乗越から濁をへて黒部の溪流を徒渉した冒險的經驗を有するから、登山者はこんな方面の詳しい智識を氏に就いて得ると有益であらう。

中房について其他の事は、本書の始めの部に詳述してゐいたから、今は重復

を避けて、簡単に筆をおく。

二、有明山

信州では山の中で高峯には皆「嶽」の字を附けて呼び、少し低い山は何々山と言つて居る。有明山は「有明山」と言つて居るから、連峯の中では寧ろ低い山なることが解る。前述の通り、此の山は常念山脈の高峯に連つては居るが、特に人里近く稍離れて、半ば獨立して平地の一端に聳えて居る。之れを譬へば、北アルプスの斥候が松本平に現はれた姿である。附近信州の人達は朝な夕な之を眺めて、其の富士に似た姿を喜んで居る。太古の時手力雄尊が戸隠の賊を平定の爲め東征された時、此の峯で遠く北方を展望されたといふ傳説に因んで、此の神を祭つた有明神社が頂上に安置されて居る。麓の有明村に有る所謂「信濃日光」の有明神社は其の前宮である。頂上は二つに別れて南北について居るが、

中房から見ると、頂上は見えず、麓の雑木林が險しく川に向ひに聳えて見える。中房から登るには、温泉場から川に沿うて僅かばかり下つて、更に左の方へ上り始める。麓の有明神社の附近から登る道も有るが、中房から上る方が趣味が有つて面白い。山の標高こそ低けれ（海拔七千四百八十四尺）、路は可なり困難で、やゝもすれば用意不周到に登つて、雨に遭ひ、道を間違へ、野營迄餘儀なくされて、食を缺き、酷い目に逢つて下りて來た人達が此迄に多くある。案外困難な山だから、よく其の積りて慎重に準備して登ることが必要である。無論中房を朝たてば、頂上で信州地方の眺望を専らにして、ゆつくり日歸りすることが出来る。山は槍ヶ嶽や立山などのやうな岩角ばかりでは無くて、多くは雑木の深林だが、險しい悪路も少くない。途中垂澤タルザハの瀧などの美觀が有る。連山縦走の足馴らしとして、先づ此の山に上つて見るのも有意義のことである。

頂上では松本の平から、牛伏寺峠の一脈、佐久から長野方面の諸山が手に取るやうに見晴らせる。もし頂上にテントを張つて、夜でも過して見れば、松本下の電燈がかすかにきらめき、やがて山霧に被はれて明滅し、山と里との接觸の景觀が面白う。

三、燕嶽

燕嶽は常念山脈中の高峯で、海拔九千百十四尺、山姿が優美なものと、登り易いのと、頂上の眺望が北アルプスの主脈の大觀に好都合なものと、頂上の小屋の設備が新式なのとが特色で、一度登攀した者の忘れ難い懐しい山である。

登山の道は、中房温泉場の直ぐ下、合戦澤を渡つた芝生の所から右手に別れるのである。山道の入口には、松本小林區暑の出張員の詰所が設けて有つて、高山植物保護を監視して居る。道は直ぐ笹山にはひるが、始めの中が急坂だか

ら、登山に馴れぬ人は、急ぐ事なく、充分餘力を蓄へて、せかぬやうにゆつくり登ることが肝要である。笹山を抜けると、白樺交りの雜木林がちよつと有つて、直ぐ縦の木の美しい針葉樹帯に入る。中程に樵夫の小屋が有つて、合戦澤の小屋と呼ばれて居る。深林の葛折の道を上るに従つて、漸く林の木の高さが低くなるので、峯に近づくことが解つて面白い。樹木の低くなる頃、眼界が開けて、晴れたる日には、遠く南方に富士の秀嶺を望んで快哉を叫ぶのである。

縦の矮林が一寸盡きる邊りには、山漆の藪が茂り、眼界全く開ける所に三角測量點が有る。三角點の丘に上つて左手を見渡すと、幽谷に涌く白雲の上に大天井から常念あたりの連山が呼べば答へんばかりに屹立して、遠く左に松本の平野が霞んで見える。寫眞をバナラマ式に撮つて見ると此邊最も面白い。

此所から上は全く眼界が開けて、白樺、はんの木の矮林が左右に見え、左手には這松ハヒツツの黒緑の原が遠くつゞく。往々兔が飛出して登山者の目をそゝらせるのも此の邊りである。燕のビラミッド形の絶頂が見えて来て、頂上の小屋が正面に高く現はれる。右の深い谷をへだて、北嶽からつゞく清水嶽の尾根が有明山の方面に走つて居る。秋登山して見れば、此邊が美しい錦を織る所である。峯に近づくと、道は花畑の真中を通る。いよゝゝ燕の肩に出ると、一陣の冷風と共にアルプス主脈の連峯がバツと目の前に展開して、あつと言はせる。中房から此所迄四時間有れば充分である。

先づ小屋で休憩して、暖かい紅茶と饅頭の甘さに舌鼓を打つがよい。小屋は赤沼千尋氏の経営で、山中に珍しい蕭洒たる新式の建築で、西の方は槍嶽カサネの烈風を防いで、東面に窓が開いてゐる。寫眞用暗室の完備したものが有る

ことも忘れてはならぬ。氣持のよい椅子によりかゝつて、窓から展望すると、有明山は眼下に、遠く松本平を見渡して、牛伏寺の連山の上から、遠く淺間の煙と碓氷のあたりを望み、上州吾妻山が雲表に見える。更に右の方へ目を放つと八ヶ岳の連峯がつゞいて、其の盡る所に富士の秀嶺が浮いて居る。富士の右手には甲斐の駒嶽から白峯連峯のあたりが霞んで見える。そして其の邊に此方から常念山脈が延びて行つて、常念嶽のあたりが雲の湧く間に隠見するであらう。

目を下ろせば、小屋の庭には美しい高山植物が一ぱいに花を咲かせて居るし、直ぐ崖の下は一面の花畑で、黄白の可憐な花が燦爛たるに目が喜ぶ。

赤沼氏は信濃山嶽會の幹事で、痛快の男子、嘗て病魔に犯されて、海濱に静養したが功無く、ふとした事で登山を試み、健康を恢復したのが動機で、山に趣

味を持ち、踏破千里、私財を投じて、獨力此の小屋を經營し、以て登山者を導いて居る。氏は大正十一年五月に上高地から雪の常念山脈を踏破し、夜陰燕嶽の山谷に墜落し、亡き命をからくも取止めて以來、獻身登山の爲めに盡して、其の活動が目覺しい。小屋の奥の一室に信州式の火燧が有るのも面白い。もし登山者が一泊をこゝに借りて、火燧の部屋で氏と快談するの機會が得られたなら、長へに忘れえぬ思出が得られるであらう（附録、「秋の中房」の條参照）。

小屋で小憩したら、絶頂に登つて見るがよい。道はわけも無く、花崗岩の白い砂の上をざくざくと通る。左は千尋の谷で、這松が此れを被ひ、一種獨特の奇岩が數多聳え立つて、宛然燕の鳥がとまつて居るやうなので、燕嶽の名稱が出たわけである。其の岩の間をくゞりくゞつて、小屋から數丁もすれば絶頂に達せられる。

絶頂の展望は天下無比である。前に小屋で見た東面の見はらしは、尙一層眼界が開けて来る。自分の今立つ峯の北のつゞきには、同じ山容の北嶽、それから餓鬼嶽、唐澤嶽の雄峯が連立して居る。餓鬼嶽の東には清水嶽の尾根がブーッと續いて有明山に終つて居る。更に北の方へ目を放せば、遠く長野のあたり、妙高黒媛の山脈から、白馬連峯がアルプス主脈の最北端に巍々として蟠り、其一派がぐんぐん左に延びて、摩天の大壁を形式し、其の蔭には、越中立山連峯から五色が原の雪溪が光る。高低幾多の峻峯が、高瀬川の谿谷を隔て、壯絶の屏風を展開する。そして大小幾多の雪溪が、長く短く、細く太く、人の登攀をそゝるかに見える。越中笠嶽が近く眞白に見えるあたり直ぐ左は、主峯槍ヶ嶽で、鎌尾根の岩角を四方に走らせて、巖然中樞の高座に天下を睥睨して居る。其の左には「大ばみ」から穂高の峻嶺が残んの大雪溪幾條、其の壯麗さは人間の筆

紙やカメラの科學力を超越して、雲を突いて居る。

自分の足下は即ち高瀬川の谿谷で、湯俣の谷が縦に、白い流れが日光に光る。あの谷間の流れは皆温泉ださうである。自分の脚下の這松の林を分けて直下すれば、あの湯俣の湯に浸ることがわけも無さうに思はれるが、其れは容易の事ではない。更に高瀬川の畔を左手に遡つて、水俣から槍の大雪溪を攀ちたならばなど考へるが、此れも空想に近い。

槍ヶ嶽の北面天丈澤の大雪溪はにくらしい迄壯大である。あの飛彈山脈主脈の蔭にあの音に聞えた黒部の幽谷が有るなど、想像して見ると、急に足がぶるゝ、振へるやうに思はれる。もし小屋に一泊して、夕陽が槍に没する頃、あの高瀬の谷に金色の雲が涌いて、向ひの連峯が紫色に映えるのを見るならば、到底一日や二日で下山する氣にはなれぬであらう。燕小屋のあたりでも良いから、

是非赤沼氏を煩はして、展望諸峯の説明をして貰ひ給へ。

霧が飛來して、四面濛々となり、風が起つて、山嶺危険が多いから、總て高峯の絶巔に永居は無用である。

小屋の南の更に小高い丘に登つて見る。常念山脈が自分の立つ足下から蜿蜒々と南に延びて、龍の背を成して居る。蛙岩から爲右衛門吊岩の邊から、大天井の峯の蔭に常念岳が稍左方に見える。

小屋で晝食をし、眺望を肆にして、雲霧の去來する様を見て、ゆつくり下ることが出来る。小屋の附近大岩石が千尋の谷に望むあたりは、冬期幾丈の雪が棚形をなす所で、赤沼氏が所謂雪のバルコニーの場所であるが、夏ならば多く雪は跡を止めない。下り坂は二時間も有れば充分だから、午後二時か三時には中房に歸着出来る。學生など健脚の者は、朝早く中房をたつて、正午に歸つて

來るのである。忘れて居たが、燕登山の路には水が得られぬから、登山に當つては、水筒の用意を忘れてはならぬ。

四、餓鬼嶽

此れは名前が頗る怖い名前なので、一寸興味をそゝるが、實際山の工合も險岨で、歐洲のアルプスを偲ばせるものがあるさうで、専門家には餘程興味があると云はれて居る。西洋人が非常に好む山である。

燕に續く北嶽から尾根つゞきに餓鬼嶽へ登山すると、常念山脈の殆ど最北端に上るわけである。有明山が常念山脈の東北端の斥候ならば、この山は最北端の斥候と言へる。前者が優にやしい文學的の名前で、富士にさへ姿が似て居るのに、此の山の魔道に近い名は些か物凄しい。

北岳から北すれば、東澤乗越に出る。こゝは元來中房から中房川を溯つて、

常念山脈を越えて、高瀬川の谷に出る道の通る所、即ち乗越ノッコシである。だから路を中房川に取つて此所迄來れば、尙容易に來られるわけである。東澤の乗越から直ぐ餓鬼岳にさしかゝる。山は標高はさして高くは無いが、前述の如く險岨で、人跡が少い。山中で夜營しやうとなれば、尙一層困難を感じる。何となれば山が開けて居ないのに加へて、水が少しも無い。雪も無い。これが重要な夜營の條件を欠くわけである。崖と藪を踏破する覺悟と共に、水の無い所で夜營する用意が無ければ、ひどい目に逢ふことになる。

山上の眺めは信州の北部を専らにすることが出来る。そして此れは燕岳よりは更に北に寄つて居て、大町の平野に近いのだから、大町の附近、其の北の三湖の邊が一望に見下ろせて、松本平の北部梓川の下流の北走する流域がよく瞰下出来る。其れより北は燕岳頂上の展望をもつと近くしたと思へばよい。東の方

に清水岳の尾根が続いて居るから、道を其の方へ開いて行つたら痛快であらう。そして途中で更に夜營でもして、有明山へ達すると愉快である。或は逆に先づ有明へ登つて、清水岳から餓鬼へ行つたら面白い縦走が出来るであらう。

餓岳の北方に唐澤岳といふ一峯が有る。山が続いて居るが、そう高い山では無い。そして此れが常念山脈のほんとうの最北端で、之れを超せば直ぐ大町の平地になるわけである。大町の方から此の山へ登る里人は有るであらうが、登山家の此の山に登ることを餘り聞かぬ。中房、大町共に發山の根據で有りながら、其の直ぐ近所の此の二山に登らぬのは恨めしい事だ。徒らに外人に讚美を縦にさせておくだけで無くて、日本人にも稱賛されることが山の希望であらう。有明、清水岳、餓鬼、燕の圓周的縦走が、中房を中心にして盛んに行はれるやうになることを著者は希望するのである。

五、燕岳から常念岳迄

燕の小屋から常念山脈を南に縦走することは、今では誠に容易な愉快な試みである。坦々たる大道とも言ふべき立派な幅の廣い道が、高低極めて少なく附いて居る。毎年の中房あたりでよく修繕するので、此れならば盲人と雖も通れさうである。登山家は此の道を稱へて、日本アルプスの銀座の大通りと言つて居る。赤沼氏は此の便利な道をして、やがては自轉車の通れるやうにしたいと言つて居る。山岳を一般化するには、最恰好の所であらう。只怨むらくは、餘りに心なき有象無象の往來するが爲めに、鐘詰のからや、草鞋の捨てたもの、キヤラメルの紙などが餘りに路傍に散亂して、尊い自然の風光を損つて居る。心ある者ならば、同じ捨てるにも、人目に立たぬ岩かげに捨て、貰ひたいもので有る。山に登つて切角思ふ存分自然に浸つて居る時に、人爲の跡に餘りに屢

屢逢ふことは、興の醒めることである。

道は多く山脈の脊稜の西側を通つて居るが、時々東側へも出る。一般に常念山脈では、槍ヶ岳風のあたる西側は寒くて、東側は風無く、日をよく受けるから、暖かて高山植物が多い。此の邊の岩石に「岩ぶすま」と稱する黒色の蘚苔が着いて斑點を石に與へて居る。天氣の時は乾いて形が極めて縮少し、濕氣を受ければ大きく延びる。食用になるから、夜營の時の汁の實になる。キクラゲのやうな舌ざはりである。そしてこの苔が槍ヶ岳の見える範圍だけにあるから面白い。蛙岩といふ奇岩の間を通る。「かへるいわ」の名前が、信州の山人の訛りで、「ゲローイワ」と言ふのも面白い。燕岳と蛙岩のあたり迄には、高山植物の珍品駒草がよく目につく。東天井のあたりにも澤山ある。

暫く行くと、大天井の雄峯が目の前に屹立する。其の麓が爲右工門吊岩と言

つて、以前は岩石が巨礫の落ちた戦場のあとの如く缺け崩れて居て、左は千尋の絶壁、右は直下に雪溪で、岩石を上下するに肝を冷したものだ、今は立派に階段が付いて居て、越すに平氣である。嘗て著者が山岳隊と共に始めて此の斷崖を通つた時、右の雪溪の下部が暗く熊の形に見えたので、熊が現はれたとあどかされた事があるのを思出す。

それから上は大天井の峻峯で、路は幾回の葛折をうねやつて行く。頂上の少し横が所謂「池」の所で、左右の高峯の間の風よけの場所で、残雪からしめ出す冷水が溜つて居る所は、夜營に好適の地點である。もし天幕を携帯したら、此の九千尺の高所に一夜を明かして、寒月の冴えを夜中に見るのも痛快である。成城山岳隊が大正十年にこゝで野營をやつた。寒風を犯しながら明月の皓々を稱したものだ、夜半大雨沛然として至り、翌朝八時頃迄橋まされた事が思出され

る。

大天井の峯は此の附近で一等地を抜いて高いもので、城の天主閣が巍々たるに譬ふべく、信州の土語、天主を「おてんしやう」と呼び、其れに大天井の字をあてたものだといふ。岩石の間によく雷鳥を見ることが有る。ことに暴風の起らんとする前には、餌をあさるべく出歩いて、人の傍迄可憐な姿を運んで平氣で居るのを見ることが出来る。南面の下り坂も葛折りて、ざくざくと砂道を快走する。大天井を下りつめて、二三丁南すれば、二ノ俣の小屋に達する。中房から此の小屋迄實に容易な一日の行程で、健脚の人々は、此所で宿泊することが惜しいやうに思はれる。

二ノ俣の小屋は新舊二つの小屋から成つて居る。近時多くは番人が居ないが、鍋の用意が有り、這松の薪を採りさへすれば、煙むいながらも暖かい一夜を過

すことが出来る。

「池」の所から東天井の肩を通つて「河原」の石間を過ぎ、榛の木の茂みを一寸通り抜けると、直ぐ常念の峯に近づいて、其の肩の部にある乗越ノッコの小屋につく。一名常念坊とも言ふ。此れは常念岳絶頂の直下で、西には遠く槍の主峯を見はらし、附近には這松の林と、多少の平地とを有し、東面眼下に廣いお花畑を見下す絶好の宿泊地である。もし快晴の日に天幕を張つて、終日をこゝに暮して見るならば、山の氣分は朝夕の雲霧の去來と共に、飽く無き經驗の資となつて迫るであらう。

著者は大正九年七月の或る日、數名の成城中學生と共に、天幕を張つて快晴の一日を此所に樂んだが、餘りに氣持が良くて面白いので、紫光線の強烈な日光を浴び過ぎて、一名の日射病患者を出して心配した事が有る。時恰も新設の

小屋の建築完成に垂んとする時で、其の大工さんの或者が、雷鳥の可愛らしい雛を取つて来て、籠に撫育して居るのを見た事を覚えて居る。小屋の直ぐ上の前述の「河原」の石間には、山魃といふ可愛らしい動物が出没する。信州では此れを「おこぜう」と呼んで居る。魃では有るが、體が極めて小さくて、人間の貪慾なるを平素知らないから、人が近づくと石の間を抜けては、直ぐ足下に迄来て、ビヨコンと顔を出して眺める姿の愛らしさ。一寸驚いて逃げても復傍に現はれる。人夫等は山の神の使だと言つて神望な物にして居るのも面白い。

常念乗越の小屋は、南安曇郡青年會の經營にかゝり、設備が仲々完備して居る。糧食も有り、草鞋から晝はがき其池迄萬端登山者の便利で有るが、物價の頗る高いには閉口する。中房から常念岳へ登るには、此の小屋で一泊して、翌日早朝絶頂へ上れば、文字通りに朝食前の事である。然し常念へ登るだけが目

的ならば、別にもつと容易い面白い道がある。

信濃鐵道の柏矢町驛ハヤヤダマ或は穂高驛で下車して、直路西に進めば牧區に出る。これが正面からの常念登山道路で、約一里、丁度有明驛から有明温泉迄位のものである。牧區には登山案内所もあり、高原の客舎に宿泊することも出来る。登山の口は一の澤、本澤などが有る。本澤は豊科驛から西に進むのである。一の澤を上れば雜木林や松林の下を氣持良い林道が通つて居るので、其の滑かな芝生の路を極めて愉快に木蔭の涼しさを楽しみながら、お花畑近く迄行けるから、他に得られぬ平易な登山口である。そしてお花畑を上りつめると、直ぐ前述の乗越の小屋で、常念頂上の直下になるわけである。此の行程は極めて樂な一日の行程である。

本澤から上るには、豊科驛から、堀金區をへて同じやうな林道を通つて、直

ちに前常念へ出るが、其の邊り前者より、道が些か急坂である。然し前常念から奥常念に遷るには、さう難事ではなく、一氣に峻峯に攀る面白い道である。

常念岳は奥常念の峯が最も標高が高く、松本の平野からは常に雲表に聳えて見えて居るので、此邊で「岳」と言へば、常念岳を意味することになつて居る。西の方中山峠や東鎌尾根の方面から常念を望むと、ピラミッド形に天を摩して屹立する雄峯で、二の俣の小屋と乗越の小屋とが隨る高い山側に左右に並んで見えて、其の邊りを細い山道が水平に一直線につゞいて見える所は勇壯な感を與へる。

乗越の小屋から常念の主峯に攀じると、岩石の崩れ廣がつた上に這松が平みついて一面に之を被つて居る所へ出る。其の上は岩石が露出して、頗る石が崩れ容いから、登山隊は成るべく一人々に間隔を置いて上るがよい。先年金澤第

四高等學校の學生團體が登山して、一員が岩石の崩壊に逢つて大負傷を受け、擔ぎ下されたのは此所である。

絶頂は直ぐ上に見え居ながら、なか／＼達し難い感を起させる山であるが、従つて其れだけ頂上に達した時の愉快は大である。此山には稀品の高山蝶が多いので有名だ。一の澤から上る中腹の深林のあたり、溪流に憩うて辨當でも食べて居ると、もう幾多の美しい蝶類が翻々とやつて来て、帽子や食品にさへ止るのである。林の邊から高山植物も種類が多い、可憐な車百合の如き、お花畑の黄白まばゆき迄の花々の色は、一度見なくては想像が出来ない。絶頂から下る時には這松の上を巧に滑つて下れば痛快だが、其の下が石間なので経験の無い人には危険である。そして滑走者の脛が松の緑に染んで、山男の緑色の保護色が出来ると面白い経験である。

六、中山峠から槍澤、坊主小屋迄

二の俣の小屋からでも常念の小屋からでも、槍ヶ岳に向ふとなれば、必ず途中、中山峠といふを越すことになる。即ち暫く常念山脈の西側を下つて、再び中山峠の急坂の葛折を上るのである。此の峠路は一帶の針葉樹林で、日蔭こそ見られ、可なりの坂であるから、汗が出る。其の峠の頂に近いあたりで、二俣から来る路と常念から来る路とが合して、其れから下り坂となる。峠を下りつめれば、二俣の谷で、二俣川に沿うて下ることになる。そして暫くだらりと下つて行くと、「池」のあとへ着く。此所が天幕を張るに便利で、多く晝食の場所となる。更に少し下ると、槍澤川（梓川の上流で、槍ヶ岳の雪溪から發する溪流）との合流點に来る。こゝで道を右に取れば、即ち槍ヶ岳登山道で、左に取れば上高地温泉場へ下るのである。

合流點から右へ約一里も川に沿うて上れば、右方に赤澤山の赤い岩角が道の上にかぶさつて見える。道の左には巨大な一つの岩石が横はるものが有つて、其の蔭が嘗ては雨露を凌ぐ夜營の場所に用ゐられたもので、火をたいた煙の趾が岩に着して残つて見える。この巨岩から、少し上れば、白樺の林を縫うて進み、槍澤小屋に着く。二俣或は常念小屋から此所迄来る一日の旅程は極めて平易で、健脚の人ならば、更にもう少し上の小屋迄上るが良い。

槍澤の小屋は、ホテルと稱へる設備が一つ、又直ぐ隣りに眞正の石室が一つ、何れでも好きなまゝに宿泊することが出来る。ホテルの方には寢具も有り、食料も有り、登山準備が整へて有るが、九千尺の高所なので、物價が頗る高いから、經濟的に過さうとするならば、石室の板敷の上に携帯の毛布にくるまつて焚火の暖を受けながら一泊するのが却つて面白い。

槍澤の小屋の少し上には新設の大槍の小屋がある。此所は昔の坊主小屋と言つた附近で、其の坊主小屋が先年の暴風で破壊された跡に新設された氣持よい小屋である。此所へは大天井岳から別に喜作新道といふ新道が通じて居るし、更に少し上の喜作の小屋にも近く、備品も仲々よく整つて居て、宿泊に愉快である。こゝから見れば槍の絶嶺はもう直ぐ頭の上で、槍の登山には此所に泊つて出れば明朝、實に朝食前の仕事である。

七、喜作新道・槍ヶ岳

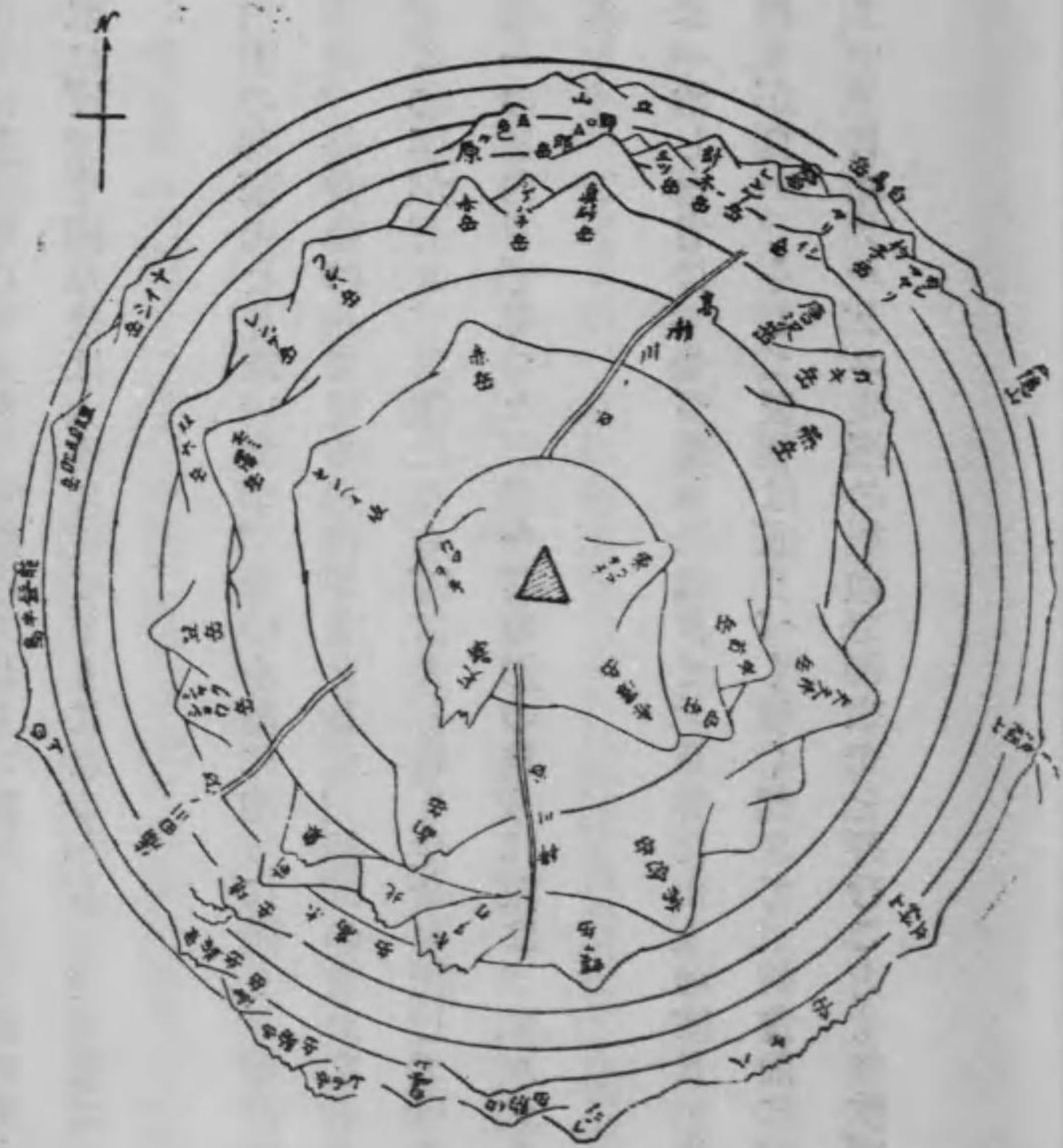
中房の主人百瀬氏が名案内小林喜作氏の案に依つて、大正十年から十一年へかけて新たに常念山脈と槍ヶ岳とを繋ぐ近道を造つたのが、即ち此の喜作新道である。道はあの爲右工門吊岩から大天井岳へ少し上り始めて、其の葛折の路を數回廻つた邊りから、右に別れて始まるのである。先づ大天井の西北側の岩石

の上を半廻して、砂礫の急坂を西に向つて直下ける。そして美しいお花畑の一端を貫いて、尾根にかゝる。馬の背越とも言ふべき左右絶壁の所も通る。こゝから東鎌尾根にさしかゝるのである。先づピラミッド形の牛首を経て、西岳の池に來る池の邊夜營の好適地となつて居る。大正十二年には中房の經營で此所に登山小屋が出来る筈である。恐らく此の書が世に公になる頃は既に出來上つて居るかも知れぬ。東鎌尾根の新しい稍険しい道を往復するのに、こゝで宿泊せずとも休憩出来ることは非常に便利なことである。それから赤澤山を左に見ながら、可なり險阻な尾根を幾回も上下する。此邊から槍の絶頂が目の前に見えて來るが、仲々直ぐには達せられぬ。そして凡そ五つ六つも嶺を上下すると、始めて稍平坦な高見の路に出る。右には高瀬川の溪谷を眺め、左に槍澤の谷と其の舊道のあたりを眼下しながら、大槍の小屋へ下る道の別れ目に來る。若し

此の別れ目から道を左に取つて、少しばかり小屋へ近づくと、一面の美しい花畑で此所に黒百合が澤山有ることは、まだ餘り人に知られて居ない。

喜作斯道は、更に鎌尾根をもう少し登る。そして愈々最後の上りつめから左に下り始めて、喜作の小屋に達するのである。喜作小屋は、もと殺生小屋と言はれた石室の邊りて、昔は獵人共が殺生をやる時に、雨露を凌いだ槍ヶ岳最高の夜營地で有つたが、今こゝに中房經營の立派な小屋が、喜作新道の開通と同時に開かれた。そして小林喜作氏父子が此れを擔當し、寢具其他を整へて、登山者には頗る便利を興へてくれたのであるが、前述の如く喜作父子は今亡き人であることは、山に登る者の追懷愛惜にたへぬ所である。中房から常念山脈を縦走するに、以前は中山峠を経て一度必ず槍澤に下り、更にこゝ迄上らざるを得なかつた長途を、今は尾根傳ひに一日にして槍の肩近く迄來られる便利を得た

槍ヶ岳頂上展望



のである。登山者は是非此の新路を一度試みられるが良い。若し槍の方から中房へ逆に途を取れば、東鎌尾根は大體に於て下りになるから、尙更道は容易いことになる。

朝早く槍の頂上の御來光を見たい者は、此の小屋に泊るに限る。穂高の險を縦走したい勇士は、是非此の小屋で特殊の用意をして、特種の有力なる案内に導かれて出發する必要がある。喜作氏ならば何人と雖も生命を托して可なりと言はれた中房隨一の案内者で有つたが、今其の影の見られぬは、アルプス山中の一大艱事である。

喜作の小屋に一泊した者は、先づ夜中に起きて、戸外に山上の寒月と氷の星の美しさを眺めるが良い。そして翌朝は成るべく早く起きて、朝食前に槍の頂上に上ることがよい。日本アルプス主峯の絶巔で御來光を拜むことも痛快だし、

朝霧のたへ間に四方の展望を肆にするは、他に得られぬ快絶である。

先づ荷物を小屋に置いて、槍の「肩」迄登る。それから杖もカンデキも捨て、穂先には全然手と足とで岩石攀ぢをやる。中程に所謂「チムニー」が有つて、上から鐵條が下つて居るが、其れを手寄らずに、岩の角を廻つて攀ぢる時、顧みて南の方穂高の嶮を望むならば、足下の千尋の斷崖を隔て、巨大なるV字形の大雪溪の豊富なる白雪と、峨々たる險惡な山客とがばつと目に映つて、足戦き魂消えるものが有るであらう。一萬餘尺の絶嶺の望は天下無比である。先の燕頂上の眺めに加ふるに、遠く加賀の白山の皚々たるを見はらし、遠く能登半島から日本海を望み、南には「大ばみ」の邊りから、穂高の物凄い山彙が雄大なる峻峯を屹立させて居る。其の向ふには焼岳の火山が幾條の噴煙をたなびかせて、温泉場の丘の如く見える。そのかげには乗鞍と、御岳の雄峯が雲間にか

すみ、更に中央アルプスから南アルプスの彼方を雲表に想見する。そして東の方は常念山脈の蜿蜒たる長蛇の脊陵が長く燕、餓鬼の彼方に續き、あの邊りの蔭が即ち中房であらうなど、想像が湧かざるを得ない。頂上に安置した小さな神社に記念の名刺でも捧げて、其の時の天候でも詳記して置いたら後人を益する興味ある事であらう。

八、穂高岳

穂高は槍に次ぐ峻峯で、最高の嶺が一萬餘尺。南岳、北穂高、奥穂高、穂高、明神ヶ岳などの高峯が群成した一大山塊で、岩角のいかめしく峻峻なる、雪溪の雄大なる、登攀の困難なる、恐らく日本一であらう。先づ天候を見定めて、充分の準備を整へ、荷を出来るだけ軽くして、糧食を携帯に便にし、炊事の煩を可及的避けるやうにして、有力な案内に導かれて上ることが絶對的に必要で

ある。大喰オホクミの蝮を越え、一旦ずつと下へ下る。そして南岳の岩壁を攀ぢる。此所が恐らく穂高連峯中の最難所で、ロープの巧みなる使用を必要とする。飛彈側をずつと廻ることになるが、道は無論無い。數年前迄は全く心當りに只一定の方向に志して向ひ、幾度か行きつまつては戻り、戻つては行つて、時間を費して進行したものが、其後多少登る者が有る爲めに、稍岩に人跡を認める所が有る。風が強いので雪は少いが、草鞋の切れることおびたしいから、餘程の豫備を必要とする。崖は岩が頗る崩れ容い。昔は可なり大きな岩石でも、上のぼつて居る間に、ずるゝと下へすべり出す物が多くて、極めて危険で有つたが、其後登山者の足で崩れるものは崩して來たから、前より比較的安全になつたさうだが、然しまだ壞崩の危険は深甚の注意を要すること勿論である。これは獨り此邊の岩壁のみならず、穂高連峯全部を通じてである。だから最南の

上高地に近い明神ヶ岳あたりに上る時ですら、多人数の登山は極めて危険である。

陸地測量部の五萬分一の地圖に「北穂高」と有る邊りが即ちこの南岳の邊であるが、不正確である。總て五萬分一圖の穂高連峯の名稱と位置は色々違ひがあるから、たよりにならぬ。登山者は宜しく経験家に問うて正確な概念を得ねばならぬ。南岳から奥穂高に出る。そして相變らず險阻を通過して明神ヶ岳に出て、それから上高地へ下ることになる。明神ヶ岳は上高地から直ぐ頭上に見えて、道は此の山を経ずして南へ直路上高地へ下れるとも言ふが一寸容易の仕事で無い。

穂高岳の縦走は快晴の山日和であれば、極健脚の者ならば槍ヶ岳殺生の小屋から一日で上高地迄行けると言ふが、これは普通人には容易の事ではない。殺生

の小屋を朝早くたつて、途中適當の所に夜營するが普通である。夜營と言つても、高い峯で岩石重疊の間で、到底天幕をゆつくり張るだけの餘裕が無いから、極めて簡単に雨露を凌ぐだけの用意をする。山の樹木が極めて少いから、夜營しても、燃料は餘程下迄下らなくては得られない。だから火を盛んにして夜中暖を取ることが出来ぬ。止むなくば相抱いて僅かに不眠の一夜を過す位の覺悟が無くてはならぬ。

天氣が良くて如上の状態である。一旦風雨の襲來に遭へば、避難の心得確實な案内者が無くてはならぬ。萬一暴風にでも逢はゞ、途中から適當な谷に下つて槍澤に出る道に精通して居るもので無くては、安全で無い。風雨の時は普通横尾と稱する尾根から、其の澤に避難して槍澤の合流點よりも下流のあたりに出ることになつて居る。不案内の者ならば尾根に傳ふ事は出来ても、さて安全の

澤へ下る事が出来ぬから進退窮することになるわけである。

槍から上高地への縦走は可能であるが、逆に上高地から槍への縦走は困難の極とされて居る。そして穂高の縦走に最も必要の條件は、天候の好適といふ事で、雨の時には寒氣に堪へられぬし、四面暗霧では、切角の展望が皆無で、何等の面白味も無く、只苦しみに行くだけである。ことに多人数の團體などでは到底成功しない。糧食の世話を省く爲めに、ご飯を搗きつぶして、ぼた餅の如くに丸め、之れを焼いて携帯するなどが便利である。

學生の團體が此の連峯の縦走を志して、多く不成功に終るのは、限られたる日數と限られたる費用とで、天候の落付く迄を待ち兼ねる爲めで、餘程の餘裕が無くては、無理である。少くも數日は喜作の小屋に滞在して、更に一二泊山中夜營するだけの用意が無くては成功しない。此の點から言ふと、中房の根據

地に滞在して山の天候を見定め、一日にして喜作小屋に達し、更に喜作小屋で天候を測定すれば先づ大丈夫と思ふ。用意周到に計畫しても尙ほ天候不良か、他に差支へ有つたらば、別に上高地から明神ヶ岳（五百分の一の圖に前穂高とある）一峯に登る位で、其の峯から峯々の展望に満足して上らねばならぬ。而も此れとて岩石が壞崩しやすい事上述の通りだから、多人數では危険である。

九、槍ヶ岳より上高地迄

槍の雪溪を滑り下りることは痛快である。此の雪溪は、盛夏一つどきに肩から槍澤小屋の上迄つゞいて居る事もあるが、夏期多くは三段位に分れて居る。這松の恰好な枝を切取つて、其れに跨つて、金剛杖で柁を取りながら滑り下るか、莖が惜しく無くば、二つに折つて其れを尻の下にして滑下するも面白い。何れにしても洋服の尻は、びしょ濡れで、尻のポケットの中の物は濡れて木の葉の如く

壓せられる覺悟で無くてはならぬ。西洋式に立ちながら滑り下る練習が出来て居れば最も巧妙である。

雪溪を下ると、槍澤の溪流に沿うて常に下ることになるので、道は極めて平易である。只冬春の間に暴風雨が有れば、道が破損して居るのは珍しくない。

朝槍の小屋をたてば、二ノ俣川との合流點を経て、一路下り坂で、上高地に夕刻早く達することが出来る。槍澤川は下流を梓川といふ。上高地に近づく頃は、漸く川幅が廣く、河原が平坦で、一部の河原の水を堰き止めて、所謂「川干し」をやれる。そして「イワナ魚」を捕ることが容易である。馴れた案内者に教はつて、石を河原の水邊の石の間に打ちつけて、石間の魚の浮上るのをつかまへる如き原始的な魚獵もたやすく出来る。取つた魚は直ぐ携帯の鹽をついで焼くと、即席に立派な馳走となる。上高地の上流河畔は、里餘に渡つて瀧

葉樹の美しい深林の中を道が通る。其所に牧場が有つて、牛馬が人なつかしげに近づいて來るも可憐である。

上高地は梓川の畔、穂高岳の直下で、土地稍開け、極めて趣味深き温泉場である。太古穂高見の尊の傳説の地で、近年神河内の字を用ひて居る。先づ河童橋の手前に旅館五千尺といふが有る。數年前の新築で、館主丸山氏は熱心の山岳研究家、登山者には得がたき便利と注意とを與へられる。只此の旅館に温泉の湧出しない事が惜しい欠點だ。橋を渡れば、神河内の本部にはひつて、清水屋といふが有る。此れは前からの温泉旅館で、立派な完全なものであるが、物價が頗る高いのに一寸閉口する。

神河内には加門治の池、明神ヶ池、大正池などが有り、半日の行程に燒岳の活火山が有り、もし更に附近を探らうとならば、信州の中の湯、白骨の湯へも

ぢきで有るし、飛彈の蒲田川の平湯から、乗鞍岳に登山を試みるも面白く、穂高の嶮を踏破するも痛快である。近年此の他は國立公園の候補となり、名が海内に聞えて居る。恐らくは數年をへずして、坦々たる大道が島々あたりから此地に續いて、自動車に住復するやうになるであらう。

旅館五千尺のあたりに、古の氷河の遺跡と想像される物が有る。丸山氏に就いて故の大關教授の學説を聞くと有益である。

神河内から中房へ歸らうとするには、先の二の俣の合流的から右折して、中山峠をへて、二の俣の小屋或は常念の小屋に一泊し、常念山脈を北に縦走して行けば、二日の旅程には極めて平易な旅である。

松本から神河内へ行かうといふ者は、島々の東迄輕便鐵道を利用し、島々迄自動車か馬車を驅つて、其所に一泊して、翌日徳本峠トクボウを越えて、早く神河内に

着くことが出来る。

十、其他の旅程

神河内からは色んな方面へ趣味ある旅行が出来る。先づ飛彈の蒲田か平場に出で、穂高山麓の蔭にあたる蒲田川の溪流を溯り、穴毛谷の溪谷から笠岳に攀ぢ、縦澤岳から双六、三俣の飛彈山脈に縦走することが出来る。或は槍の西側に攀ぢることも出来る。更に双六、三俣蓮華から、黒部五郎岳、藥師岳をへて、五色が原から立山連峯に近づくことも大縦走である。

平湯から南へ行つて、乗鞍の雄峯に登るのも痛快だし、更に飛彈に深く入つて、飛彈から御岳へ登攀することも面白いであらう。然し此等は述べ來れば際限なく、中房とはあまりにかけ隔てゝ居るから、割愛することにしやう。

吾が中房に近い常念小屋から南の方常念山脈の中にまだ別に可能な道路が有

る。前の常念小屋から南の方常念山脈の南端を極める目的で、嶺つゞきに蝶岳へ渡つて見るも面白からう。蝶岳は春先き雪の消えるに當つて、蝶形に白雪が残るから其名が起つたさうで、北の方で有明山が常念山脈からやゝ獨立して松本の平に雄姿して居ると似て、此邊の里に高峯を聳立して居るものである。そして小徑をたどつて上高地に下ることが出来る。

更に信濃鐵道の一日市場驛ヒトイチヤから西の方小倉村を経て、鍋冠山に攀ぢ、それから蝶岳に登る道もある。この邊都人士はあまり大した事に思はぬらしいが、まだ探見の餘地は可なり有るさうである。そして探見を終へて、常念山脈を北に縦走して、中房に歸着するのも面白い旅だと思ふ。ことに燕から直ぐ中房へ下りずに、餓鬼から清水岳有明山をへて中房に歸着したら一層愉快であらう。

中房から燕小屋へ登り、其所から這松の間を漕いで（信州では這松の間を漕ぎ抜けることを「漕ぐ」と呼ぶ）、高瀬の谿谷に下る道が早くつくことを希望する。そして例の湯俣を上つて、フクモノ澤から鷲羽岳附近に登り、赤岳から黒岳（水晶岳とも言ふ。水晶が出る）を極めて、南に歸つて、双六、縦澤から槍の主峯に攀ぢ、喜作新道を経て中房に歸る旅が出来るとなればよいと思ふ。嘗て中房の主人百瀬氏は、燕から湯俣に出た経験が有るのだから、一寸道さへ開けば、實に趣味ある探見になる。例の湯俣には温泉が湧出して川に入り、河中にも湧出が有るので溪流がそのまま、絶好の温流となつて居る。温泉湧出のあたりには美しい硫黄が多量に顯はれて居り、湯と共に霰石が出る。美しい飛瀑もあり、飽かぬ眺めが豊富である。湯俣は左へ水俣と別れることになるが、水俣の上流は天文澤と稱し槍につゞく。

燕岳に登つて高瀬の谷を瞰下して槍の主峯を仰ぐ時、何時も念頭に浮ぶことは、あの高瀬川の水源を更に上流に溯つて、あの天上澤から（或は其の西の千丈澤から）槍の雪溪を攀ぢれば、如何に痛快だらうといふ事である。黒部の谷の水源が人跡未到だといふのに劣らず、高瀬川の水源の探見も成功の口が近い事を祈るものである。

常念岳からは南の方へ、山つゞきに、蝶ヶ岳、鍋冠山などを縦走して、神河内へ通ずることは前述の通りであるが若し中房を根據地にして、右明山から餓鬼岳、燕、大天井、東天井、常念、蝶ヶ岳を踏破して神河内の温泉に旅塵を洗はせ、真に完全な常念山脈縦走となるであらう。

更に吾人がよく老へるのは、中房川を溯つて、東澤乗越から、高瀬川畔に出る旅である。そして高瀬川の谷に出る事を思ふと、それから二つの道を思ふ。

即ち一つは傳平と稱する野營地から、高瀬の谷を南に溯つて上述の湯股か、天上澤を攀づる道で、高瀬川には幾多の「廊下」や飛瀑が有る。華嚴の瀧をささむく壯大の飛瀧が幾つも有るさうである。今一つの道は傳平から北へ高瀬川を下つて、濁の小屋に出る。そして更に高瀬川に沿うて、葛湯をへて大町へ出るのである。或は中房で充分の準備をととのへて、例の東澤、濁から烏帽子岳に攀ぢ、それより飛彈山脈の主脈を南に縦走して、野口五郎岳、赤岳、双六岳から、縦澤岳をへて、槍にたどりつき、東鎌尾根、常念山脈といふ順序に中房へ歸着する大縦走も痛快であらう。現に成城山岳隊は、大正九年と十一年には、大町を出発點として濁、烏帽子、以下如上の大縦走に成功して居るのである。

第二、秋の中房及燕岳

有明の驛を正午頃下りて、直ぐ梓川の乳房橋の上に立つて見た。空は曇り勝ちで時々雨さへ降つて来る。眞向ひの有明山は半以上雨霧に被はれて、名だゝる信濃富士の優姿が見えない。然し氣温は案外高くて、たわゝに實つたあたり一面の稲田の黄金色が豊かな秋の實りを思はせる。小學校の前を通つたが、丁度授業中で静かな音楽の音が秋の静けさにふさはしく響いて来る。昨夜飯田町を出た時には、自分と同じバックサックを負うた何所かの學生が唯一の同好登山客であつた事などを思出して、これから目ざす中房へ行つても、山の湯の寂しみが偲ばれる。路傍の農家の垣根に見上げる栗の木が枝もたわゝに実み出した實をぶら下げて居る下を通ると、たまたまなく田園生活の趣きが羨ましい。中房川を渡ると有明温泉といふが巍然と左の丘に聳えて居るが、自分はこの建築を高原にふさはしい眺めと思はぬから、何時も道を右に取つて、有明神社の神

さびた森を通ることにして居る。神社は此の十日が例祭だといふので、庭師が二三名、神苑の樹木の手入に鋏の音が聞えて一層神々しさを増す。いよいよ峠にさしかゝつた頃は、空が稍晴れて、一人旅に氣持よい秋の日影が行手を照し始めた。釣橋の彼岸に大きな岩が有つて、山葡萄の眞赤な葉が上から掛かつて居るのに、始めて山路の紅葉に目ざめたやうな氣がしたので、カメラを出して第一感をレンズに収めた。枋たけの木峠きから信濃坂を一氣に通つたが、こゝにはまだ秋は浅くて紅葉のあざやかさが無い。只右手の谷をへだてた有明山の塀風の如く突立つた深い雜木林がかすかに黄んで、名も知れぬ木の黄色の葉が霧間に自分を迎えるやうに思はれた。

中房が見えた頃はもう夕暮で、雨が盛に降り出してレインコートの頭巾からは滴がしたゝる位で有つた。先づ林間學校が左手にかすかな電燈の光を障子に

うつして見える。過る夏若き生徒四十名と二週間をこゝに樂しき朝夕を送つた思出が胸に浮んで、懐しくてたまらない。昇仙閣に主人の百瀬氏を訪ふと、遠來の自分に頗る興味を以て喜んでくれて、妻君も可愛らしい坊ちゃん迄も出て來て迎えてくれる。この夏厄介になつた禮を述べて、秋の中房にあてがれて來た事を語り、夕食の饗應に四方山の話を開く。今年は里が非常な豊作ださうで、常ならば一二度の降霜有つて後稻刈が始まるのだが、ことしはまだ霜を見ずして秋獲が出来さうだといふ事である。稻刈にはまだ十日もあるので、農村の青年男女が暫しの湯治を樂みに來て居る連中が二百名も現在あるといふ。懐しい湯に浸つて「湯泉苔なめらかにして凝脂を洗ふ」と歌つて見る。夜はおそく迄若い衆達の躍りや歌に眠はふ。自分は獨り床の中で彼等の花のやうな歡喜のさゞめきを聞きながら眠つた。

夏ならば駒鳥の聲に夢を破られるのだが、今朝は水の音に夜が明けた。また雨だらうと思つて、カーテンを排して窓のガラス越しに天を仰ぐと、青空が見える。はてなと思ひながら窓をあけて見ると、南の谷間に霧晴れて頭上は紺碧の空が輝き、有明の峯に白雲が巻き上つて居る。涼風さつと面を吹いて秋晴の深山の朝を思はせる。さあ斯うなつては、ぢつとして居られない。時計を見ると正に七時。手早く楊子をくはへて温泉に飛込んで顔を洗ふ。宿の女中がお茶を持つて來たので、朝食を早速出してもらつて、燕嶽へ登るから辯當を用意してくれと頼む。軍人らしいお客さんが一所に登つてくれと言ふ。肩にかけた寫眞機を出して手にさげた。アルペンストックも要らぬ。只筒入りの寒暖計のみがルツクサツクから顔を出して居る。外に出てすがすがしい新しい草鞋の穿き心地に小踊りしながら、湯の宿の朝の眺望を儘にすると、下の谷間からまだ盛ん

に霧が湧いて来て、(自分が夏、林間學校の部屋から見下ろして、「霧こむる下の谷間の晴間より白樺かけに登る人見ゆ」と口ずさんだ處だ) 盛に有明の峯に卷上る。林間學校で備へてもらつた氣象觀測所が庭の彼方に白く見えて、ウエザーコックが朝風に東北に動いて居る。川を隔てた有明の雜木林は高さに至る程黄色の紅葉が色を増して見える。後ろの燕ツバメの谷はまだ霧に鎖されて居るが、同じく淺い紅葉の林が見えて、夏見た色とは全く趣を異にして居る。今年に紅葉が例年よりは少し遅れたさうで、眞紅の色にはまだ十餘日早いらしい。もし此を三宅克巳式水彩畫にあらはさうとするならば、先づ全面に黄色を塗つて、此を基調として緑と樺とで畫き上げたら良ささうに思はれる。友の三歎して居る間に自分はカメラに二三の秋色を収めて見た。

燕嶽の登山路は初めの笹山が急坂で骨が折れるが、樞の深林に入れば息がつか

ける。葛折りの道ばたに山櫻の木が二本、夏来た時に生徒と共にさくらんぼを取つた事を思出して、残りの實をさがしたが、さすがに今は一つも無い。葉は半ば枯れて半ば黄色に映えて居る。此頃からまた霧が立ちこめて、針葉樹林が暗くなつた。更に數回曲折して進み、右の谷間に面した時、ぼつと向ふが明るくなつたので、彼所に日が當つたのかと思ひながら、林の樹の間をすかして見れば思ひきや日にはあらで、櫻の葉の鮮かな黄色い紅葉で明るいので有つた。此の種の紅葉に驚かされること二三回をへた頃には、山漆の眞紅なのが道ばたに現はれて、思はず足を止めるやうになる。白樺と榛はんのきが薄黄で、頻りに道ばたに横はる。伏して草花はと見れば、あの美しかった夏草の面影は今何所にやら、咲残れる花と言へば、秋のきりんさうの黄なる、龍膽りゅうたんの枯れ葉二三、ヤマハ、コ
の僅に白い毛の花位で、イワカガミの葉だけは紫が、つて残つて居るが、種子は

大抵地に落ちて見えず、マヒヅルサウの透きとほる赤い實と、ゴゼンタチバナの朱色の實が目につくばかりである。

三角點のあたりは漆の藪が今を盛りに深紅の葉を山一面にもやして居て、人の服も顔も赤く見える。この秋の静寂が、爲めに動的になつて、一葉を見れば乙女の赤き唇というやうな事が思出されて、俗界の心理に墮しさうである。黒緑の這松はいまつの一帶の中に、落葉松の古木が新緑の如き色で二三本聳えて見え、其間に緋色の漆が纏綴して居る。空はまた晴れて展望限りなく愉快になつた。燕のあの特徴ある岩石が妙に青く見えて、山が夏よりも更にやさしい姿に見える。右の方北嶽（あの朝日新聞に寫眞が當選して秀麗を天下に知られたあの北嶽）に續くあたりから直角に下る尾根は、赤と黄の錦を織り、左の方常念山脈が、湧立つ谷間の雲の上にこげ茶色に續いて見える。眺めが愉快で足が更に進

まない。思切つて秋の紫外線を思ふ存分浴びながら、所きらはずカメラを向ける。絶頂の小屋の話聲が聞えて来る。

お花畑の花は一つもない。正に冬枯の蕭條たるもので、去月の初雪がことに此れを枯らしたらしい。只見る山菅やますげの原がカーキカーキ色に紅葉して、白い穂穂さが表面に光つて、一齊に下に靡いて宛然かもしか羚羊の毛皮と見えるが特に優しいものである。正午頃頂上について、あこがれの飛驒山脈に面して、槍の主峯から白馬につゞく壯麗の連山を恣に指呼の間に望んだ時には、感極まつて只神に感謝するより外なく、熱き涙がはら／＼と頬に傳はつた。

連山の色が夏見た時とは別箇で、見える限りこげ茶色。山角の日當りよい邊は殊に紅葉が深く、赤く見える。先月の初雪は皆とけてあとを止めず。槍の雪溪の夏よりは瘦せたものが視界に唯一の雪溪で、立山も白からず、五色が原に

も雪を見ず、笠嶽も穂高も皆黒く見える。眼下の湯俣の流れが光つて、深々の響が聞えさうである。秋ばれの空は物凄しい程透明で、白馬の麓、木崎湖が鏡と輝き、淺間が裾野迄見えて、碓氷、八ヶ嶽、富士、駒嶽、手に取る如くに見える。昨日たへて峯を見せなかつた有明の山さへ脚下に白雲の光を反射して現はれた。燕小屋のあたり槍に面した側の高山植物の紅葉は美の極で、ウラシマツ、シの透きとほるやうな深紅の地に這松の青綾を織つた高根錦のまばゆき神の御業、到底寫眞術の範圍では無い。

小屋には訪づれる人がもう少いので、極めて静寂で嬉しかつた。主人赤沼千尋氏に迎へられて、奥の間の炬燵こたつに招じ入れたのは限りない信洲のなつかしみを湧かせた。夕食には色々馳走を頂いた。そうして入日の連山が見たかつたので、有りたけの着物を身にまとうて丘上に立つて見た。丁度西空に薄い雲が

有つて日は薄日で有つたが、槍の彼方に金色の夕映がして、高瀬の溪谷が夕霧に暗く、連峯が紫色を帯びて來た。右の彼方、針木烏帽子のあたり日光を斜に浴びる所は、漸く薄桃色の美に映えて來た。暫くして日が槍に没すると、忽宛として全山暗くなる。振返つて有明の右手に安曇の平野を眺めて見ると、町々の電燈が小さくきら／＼と輝いて、天の星が地に落ちたかと思はれる。夜入時、また寒さを犯して外へ出て見たが、月が朧で、星が鋭くなかつた。

小屋の主人赤沼氏は痛烈の快男子、信濃山嶽會幹事で此夏をこゝの經營に獻心的にすごし、尙この月の半迄は此所に止るさうである。炬燵には主人と大工さんと木こりの爺さん一人、僕と四人で、夜中迄快談に耽る。林間學校の話を僕がすれば、木こりは熊の話をし出す。赤沼氏は去年五月、まだ世の人の登山を夢みぬ時に、積雪を犯して常念山脈を踏破し、夜に入つて燕嶽から谷間に墜

落した話をしやうかと言ふ。今夜はいつに無い静寂の夜である。山に来て山の話を開かなくてどうしやう。是非といふ僕の言葉に氏は乗出して來た。腕を撫しながら次の冒険談を語り出した。

「五月の半ばアルプス連山には二尺あまり雪が積んだ。僕は山嶽會員の友人と共に上高地に居たが、あまりに雪の山の美しさに、急に常念山脈から中房行を思立つた。中山峠を通る時四面皚々道を失つて時間を費した。二俣の小屋は大半雪に埋れて、はひる可くも無かつたが、小屋の彼方に妙に雪の解けた所から珍しくも露の臺^{たぐ}が出て居たので、摘取つてルツクツクに入られる限り入れた。金カンヂキのお蔭で雪の上が極めて歩行に易かつたので、鼻うたで愉快な縦走を続け、大天井に上つた迄は良かつたが、其所から下り道は全部雪に被はれて見えず。あの急傾斜が雪の氷と化して居たので、一步毎にアルペンスト

ツクで足場を作りつゝ下りて來た。所が途中で雪が堅氷と代り、アツクススの刃が立たない。歸るには歸られず、下るには下れず、風さへ吹いて危険甚しく、苦心慘憺、三時間を費して辛くも蛙岩にたどりついた時は、日はとつぶり暮れて四面暗々、疲勞して岩蔭に眠つてしまつたので、燕の小屋場に着いた時は既に夜が更けて居た。然しもうこれから中房迄は一走り、道は精通して居るから、氣をゆるして金カンヂキを脱いで腰につけたのが一大不覺。歌ひながら岩角に出た一刹那、足を踏みはずして、はつと思ふ間もあらせず、目から火が出るやうなシヨツクと共に千尋の谷に墜落した。夏ならば榛の木と白樺が二三間もの高さに天を突いて居る藪が、雪の吹きだまりの爲めに樹木盡く埋没して、垂直に近い急傾斜の氷面と化して居たのだから、足を先きに暗黒底ひなき谷底に滑つて行つた。此時僕の服装は厚いメリヤスのシャツに、毛のスイター、冬の登山服に、レイン

ユートで、バンドで堅く腹をしめ、寫眞機を二つ左右の肩から兩脇に掛け、ルツクサツクには五六貫の携帶品がはひつて居て、二俣で採つた落臺で膨らんで居た。後から思へば二回迄回轉したので、ストツクは振落してしまつて居た。二分落ちたか、三分滑べつたか知らぬが、墜落の瞬間萬事窮すの感が浮んだ時、死に面した人の感ずる如く、父母を思ひ、弟妹を思ひ、今死んでは残念だといふ恨みが浮んだ。殊に權威ある信濃山嶽會の幹事として、自分が斯くも不覺の死にざまをすることが限りなく遺憾に思はれて、無限の寂しみが身にしみたまへ、がさりと右手に觸る物が有つたので、夢中でかきついたら、身體は墜落の墮性に一振り振られて、ぱたと止つた。はて止つたなと思つた。奇跡、奇跡！ 榛の木の一枝が雪の上にびんとはねて居て、其の先が上方に灣曲して居た所に引つかゝつたので有つた。夢中で左腕を枝の灣曲部にまはして、其手で堅く腰のバンドを握み、

我に歸るとルツクサツクの負革が餘つて居たので、此れを枝にまはして腰に止め、辛くも身をぶら下げることが出来た。此の時上の峯から「オーイ」といふ友人の呼聲が夜の靜寂を破つて聞えたので、聲のかぎり「オーイ、助かつた」と叫んだが、自分の聲の盡きぬ中に上の聲が「オーイ」と聞える。數回此れを繰返したが、自分の聲が上に達せぬ事が解つた。上の聲は空しく「オミイ〜」をつゞけて居るばかりである。此頃月が雲間を出て皓々と四山を照し、腕時計が獨り皮肉にもかち〜の音をきざむ。斯くして上の聲は十二時近く迄聞えたが、其時はたと絶へて呼べども答へが無い。谷間の何所よりか寂しい杜鵑の聲が聞えて無限の寂しみを添へ、「死出の田長」といふこの鳥の名前が思出され、天地に孤獨のたより無さが身にしみて、今は涙さへ出なかつた。其の中にす〜と眠くなつて来る。はつと思つて氣を取直して死地を免れる。眠くなる時は妙にば

一つと身體が暖かくなるが、氣を取直した時は、反動として身を切る如き痛寒を感ずる。こんな事を繰返すこと數回、月の光に漸く氣が付いて見ると、直ぐ下に一つの岩が雪の面から突出して、其の蔭に木の枝が澤山見える。あゝ危なかつた。あの岩に打當てられたら、今頃は死んで居ると思つて、胸を冷したが、直ぐ復あの岩の下へたどり着いたら、確かに身を支へることが易いだらうと思ひついで、全身の勇を鼓して辛くも數間を滑るやうに下りて、岩の下に腰を下して、氣を沈めた。此時夜は深く寒さが身をさすので、此のまゝ朝迄こゝで生きられるものやら疑はしい。出来るならば何所かに這上つて、助かるなら助かりたいものだといふ望を起して見たが、先に落ちて來た急坂をまた上ることは到底不可能である。月の光りで見れば、右手の三角點が一番近かさうに見える。攀ぢるにはカンヂキが腰に有るので、到底足が立たぬ。そこでカンヂキを腰か

らむしり取るだけは取つたが、さて紐が氷つて居て取扱へない。やうやくルックサクから固形アルコールを出して火をつけ、紐を一つ一つ熔で融かして、兎に角足にくゝり付けた。アルペンストックは墜落の時振落したので、雪に足場を切る事が出来ぬ。苦心慘憺、神に念じつゝも、死力を盡して三角點に攀ぢ上つて、始めて助かつた感がした。

あゝ死を免れたと思つた瞬間、あの友達はどうしたかと思出した。丁度三角點に地圖の破片と手帳が有つた。人の足跡は一つも無い。友達は此等を振落して同じく谷間に墜落したらうと始め思つて、片身の品を大切にポケットに收めて見たが、また思直して地圖を取出して見ると、鉛筆で「十二時頃此所をパス」と書いて有るのに氣が付いた。友達はこの通過して行つたのだなと、始めて稍安心した。それから不自由な足を引きづつて中房へと下り始めると、下

の方からがやく、人聲がし出した。やれ再び人間に逢へるかと思つて居ると、中房の人夫が数名、戸板をかつぎ、ブランドー、ウキスキーを提げ、綱帯や薬を備へて来るのに會つた。この短時間に斯くも周到の用意をして、雪深い真夜中に來てくれた人達を見た時程人間味の温かさを感じた事はない。人夫の一人があはて、言ふ。「今報告によると、山嶽會の誰だか燕の谷へ落ちて、だめだらうちう事だから、搜索に來たのだが、どの邊かね。」この時始めて僕は友達が自分の不覺の名を最後迄秘して居た事を知つて、友情の温かさへ胸にせき上げて、暫しぼんやり立つて居た。「實は其の落ちたのは僕で、木の枝につつかかつて、やう／＼三角點に這上つて助かつたのだ」と言ふと、「お、赤沼さんけえ。何ちう天のお救いぢやねえか」と言ふわけで、應急の手當甲斐々々しくいたはつて呉れた。僕は全く死線を越えた再生のうれしさに、ポケットの財布をはた

いて、悉く人夫に分け與へて感謝した。

中房に着き静養して、家に歸つたが、母親の心配が悲しくて、墜落の話秘して居たところ、事件が新聞にのつて、父親の目にふれた。翌日の記事には「其後赤沼氏は恢復元氣旺盛だが、左腕に凍傷をうけ、右腕に擦過傷を被つたと出たので、包む能はず一切を白状した。凍傷のあとは今でも酒を飲めば、ばつと赤くなる。酒宴興酣なる時に、着物の袖からそれが目につくと、僕ははたと興がさめて、あの谷間の寂しさが胸をつくから、到底シャツ無しではその後酒が飲めぬ事になつた。そしてさすがの我輩も暫しは斷然山の生活はもう止めやうと堅く決心したが、一月たち二月たつて、燕の彼方雲晴れ雪消える頃には、再び山嶽の憧憬おさへ難く、神の惠の無き命を以て爾來獻心的な努力をして居るのである。」

ことし氏は自ら筋書を書いて、自ら役者になつて、此の墜落のあたりの活動寫眞をフィルムに取つた。そうして冬期には更に槍、穂高を縦走して第二巻を造り、槍烏帽子を踏破して第三巻を完成し、天下に冬の山の宣傳をやらうと威張つて居る。

翌朝はまた晴れて來た。寒暖計を出して見ると、室内正に六度。戸外の風の中へ出して見たら、薄日の爲めか七度五分迄上つた。前夜中房では室内十二度で、戸外六度であつた。頂上の沸騰點は九十二度を示した。赤沼氏はまだ話が盡きぬから一所に山を下りやうと言ふ。今朝わなで取れた兎をルツクサツクにぶら下げて僕の先に立つて下りて來た。中房で僕は研究の材料に湧出の温泉を瓶に入れて居る間に、氏は尙近邊を視察して居た中房の主人に來年の再訪を約して峠を下りた。また雨が降り始めたが大した事は無い。近在の男女が下駄ばきで

ぞろぞろ上つて來る。赤沼氏は途中中房に關係ある面白い傳説を話して呉れた。そしてその舊跡に僕を案内して呉れた。有明村で氏と別れて、僕は午後五時の汽車で東京に歸つた。(十一、十、五)

日本アルプスと林間學校 終

著者 成城中學校山岳部代表者

定價金二圓八十錢

著者 成城中學校山岳部代表者

編輯 齋藤 盈治

發行者 株式會社 同文館

右代表者 田中 六藏

印刷者 友文社

神田區三崎町三丁目一番地

大正拾貳年八月一日

印刷

大正拾貳年八月五日

發行



日本アルプスと林間學校

發兌

振替貯金口座東京一三五電話本局三〇三〇
東京市神田區表神保町貳番地

株式會社 同文館

714Q-26

賜台覽 日本の少年團

四六判布裝
全一冊
定價貳圓四十錢
送料十八錢

後藤新平序、小柴博著

著者は現に文部省囑託少年團調査員にして、東京少年團研究の責任者自ら東京少年團を創設して苦心經營茲に十年現にその團長たり、曩きにはロンドンに開かれたる第十一回ボ
ーイング・カウツ・インターナショナル・ツヤンポリーに日本代表者として出席し、親しく研
究調査を遂げるなど、經驗その右に出づるものなき著者が無冠の大夫として縦横に論じた
る近來の快著、教育の革命書、少年團の一大羅針盤なり。

文部省社會
教育課長 乘杉嘉壽 著

社會教育の研究

菊判布裝
全一冊
定價五圓八十錢
送料十八錢

文學博士 建部遜吾 著

現代文明と思想批判

四六判上製
全一冊
定價三圓二十錢
送料十八錢

東京株式會社 同文館 神田

終